
召還者の異世界奮闘日記

銀野 臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻還者の異世界奮闘日記

【著者名】

銀野 臨

N8852Y

【作者名】

あらすじ

家でテレビを見つづくついでいたらきなり異世界にトランプした翔子

なんやかんやで1年たちこっちの世界にも慣れてきて元の世界に帰る方法を探しつつ平穏な生活を送っていた しかしある訪問者によつて平和な生活に崩壊の兆しが・・・?
*基本ゆるゆるでお送りします。展開が急かもしれませんがそこは生暖かい田で見守つてくださいと嬉しいです。

プロローグ（前書き）

文才もないのに勢いで書き始めた小説です
ご都合主義で強引で展開が急ではやいかもです
お世汚しにしかならないと思うんですが読んでくださったなら幸いで
す！

プロローグ

タイムマシンがあつたらいつに戻りたい？

小学生だった頃友達にそんなような質問をされた記憶がある

あの頃の幼かつた私はなんて答えたのかは思い出せない

「えいと漢字テストの前がいいな～えへへ」というようなことを言つていただろう

もしも、いや今そんな質問をするような人は私の周りにはいないが
もしも、私が今その質問を投げかけられたら全力でそりゃもう全力
で答えるだろう

1年前のあの日に戻せと

この世界にトリップしてしまった日に戻せと

私は大声で叫ぶ。

こんなにヒックリマークつけてしまふのなんぞこの時間以外はないよなーというどうでもいいことを頭の片隅で考えつつ次のメニューに取り掛かる。

アネスト食堂。

小さな町スコーンの隣にある小さな食堂た

なると殺人的な惜しさになると

だって大賑わいなのに店員が私を含めて4人しかいないのだ。
今でさえ殺人的に忙しいのに私が拾つてもらう前は3人で切り盛り
していたというのだからその忙しさを考えると鳥肌が立つ。

1年前、私はこの世界にやつてきた。

の口から「おじいちゃん」と呼んでいたのだ。

訳あって高校生なのに一人暮らしをしていた私はそろそろご飯を作らうかなーなんて考えながらだらだらとテレビを見ていた。

つたのだ。

普通異世界トリップする時つて神様が現れて、みたいなくだりがありそだがそんなもん無いきなりトリップである。要するに説明

ゼロである。

しかもトリップした時間が最高に空氣読めていなかつた。

場所はアネットさんの家。そこはいいと思う。人の家だしよく小説に出てくる森とかじやないし。

しかし！タイミングが悪かったのだ。その日はアネットさんの娘さんのお葬式の日だつた。しかも弔いの儀といつ家族以外は絶対に立ち入つてはならない儀式の最中に。

空氣を読めないにもほどがあると思ひ。

幸いといつていいのかはわからないがその時そこにいたのは娘さんの家族であるアネットさんとアネットさんの一人目の息子のドミニクさん、二人目の息子のアドルフくんしかいなかつた。

その3人が本当にびっくりした顔をしていたのを覚えている。なんでも弔いの儀は家族以外は入れないよう結界を張るらしい。なのに私が入ってきたからとんでもなく驚いたと後口言つていた。

まあ私もそれに負けないくらいびっくりしてたけどね！

でも驚きすぎた人間は逆に冷静になるようだ。

私はその例に漏れずものすごく落ち着いていた。普段でもこんなに落ち着いてねーよつてくらい落ち着いていたのだ。なので周りを觀察する余裕が生まれた。

そして余裕が生まれてしまつた結果ある考えに至つてしまつた。

これは私が好きな小説のジャンルのアレとまったく同じじゃないか？あの違う世界にレッジゴー！あのジャンル・・・

い、いやいやアレは小説の中だけだって！ありえないありえないいやでも固まってる人たち田の色と髪の色がありえないくらいカラフルだし家の作りも日本と違う。さらに決定的なのはランプらしきものが浮いていたのだ。空中に、フワーッとワイヤーも無く・・・

そこまで考えて背中に汗がつたったのを今でも鮮明に覚えている。そして私は震えながら質問した。

「 ジャンゼルですか？」

記憶喪失者かつ！つてツツコミが現実逃避のように脳内でとんだ。

私の「『いはべ』」発言でアネットさん達3人は我に返つたようだつた。

固まり状態からの復活である。そこまではいいんだけどその後の行動が問題だった。なんとまあ我に返つたドミニクさんがナイフらしきものを懐から出したんだよね。

あはは・・・やっぱり普通に懐に刃物入ってる時点で日本じゃないよなあ銃刀法違反してるくらい刃渡り長いし。

私がこんなくだらないことを考えている間にドミニクさんは私のすぐそばまで来ていて刃先を私の首元に向けていました。なんてすばやい行動。

「手、挙げる。余計なことはするなよ? 血は見たくないからな。」

もちろんソックロー挙げますよ手。だって怖いからね刃物。平凡な女子高生は刃物向けられたら言いなりになっちゃいますよ。つか物騒なセリフだなオイ。

そんなこと現実逃避じみたことを考えている私をよそにドミニクさんはおとなしく手を挙げた私を縛りつと棚から繩を取り出していました。

しかも結構太めの繩です。紐とは間違つても呼べないくらい太い。縛られたら絶対痛いです。M気質の人以外は絶対無理ですアレ。ちなみに私はどちらかといえばうつん要らない情報ですね。そう、これも現実逃避です。

つてまた変なこと考えている間に田の前に繩がつ! つか私つてさつきから変なことしか考えてないな!! しそうがないかこの状況が変だもんね!!!

あーでもやつぱり嫌だよこんな。大人しくしてたほうが良いだろ
うけどやつぱ嫌だ。私悪いことしてないのに何で縛られなきゃいけ
ない訳か…そんな趣味は無いんだよ…

・・・あ、泣けてきた。急に泣けてきたよ私。さっきまで落ち着いてたのにね。グスッ。感情の起伏が激しいんだよね女子高生は。う一人前で泣くなんて屈辱。我慢せねば・・・グスッ。

つて泣いても無視かよ…この男は…か弱い？女が泣いてるのにシカトだよシカト。なんて冷徹なんだ。この悪魔、人でなし、鬼畜やローがあああああ…！

逃げたい。けどもう遅い。縄は私の手首に巻きつけられている。
そして縄が縛られる瞬間

「やめなドミニク。今すぐナイフを置いて縄もしまいなさい。」

凛とした声が響いた。

そのときの私は涙で視界が潤んでいたドミニクさんを内心のしる事と逃げる方法を考えることに必死だったの一瞬誰が言ったのかわからなかつた。というよりここにいる誰かが私をかばうなんて思つてなかつたので空耳かと思つてしまつたのだ。

「でも母さん！結界を張つてるのに中に入つてくるなんてありえないだろ！？そんな怪しいやつを捕らえないと」

しかし田の前の男が反論しているから空耳ではない様子。まじか。かばってくれる人がいたのか。この声からして1人いた女人の人だな。

「いいからしまいなさい。そんな小さな女の子泣かせて・・・。いい年した大人が何やつてるの。」

女人人が言う。ああ、なんていい人なんだろう。でも小さな女の子つて私一応17歳だけど。まだ小さいのか？

「泣いてるのも油断させる作戦かもだろ！？それに見た田も魔法で変えてるのもだし！」

鬼畜男（いま命名）も言い返す。確かに「もつともですけどそんなことはありません。」

「うるさいよ！もう20年近く食堂やつてきた私をなめんじゃないよー悪いやつがどうか見極める田ぐらい持つてるわー！それとも母さんを信じられないのー？」

とうとう女人人が叫ぶと鬼畜男が黙り込んだ。どうやら女人の人の勝利のようである。

言い終えた女人人は私のそばにやつてきて微笑みながら言った。

「悪かったね、怖い思いさせて。もう大丈夫だから安心なさい。」

私はさつきまで恥ずかしいとか考えていたくせにその言葉と微笑みに思いつきり泣いてしまった。

「せ、これ飲みな。体が温まるから。」

「ありがとうございます。」

かばつて貰つて大泣きした私はその後口アラしき飲み物を飲んでました。

なぜ「らしき」がつくのかとこつと見た田も香つも口アなの味が「一ヒー」という摩訶不思議な飲み物だつたからです。絶対甘いと思つてたのに…苦かつたよ「ノヤロー

「それであんたはどうからでいつかに来たんだい？」

わざアネットと名乗つた女性が聞いてくる。

い、いきなり答えにくい質問を…

まあそこは氣になるよね普通。やつぱ正直に答えるしかないよなー
私嘘下手だし。へんに嘘ついても余計に疑われるだけかもだし。

「私は日本という国から来ました。何故ここに来たのかはわかりません。家にいたら急にここに来てきました。」

正直に答えてみた。そして思ひ。

これ自分でたら警察に突き出されわーと…。怪しこじこじの上ないよ！

「二ホンヘビーダイソーハ？初めて聞いたよそんな国知。」

やつぱり聞いたこと無いんですね・・・。懐からナイフ（刃渡りが長いやつ）が出た時やココアらしきものが出た時点で確信してたけどさう実際にいわれるときついモノですね。

ああ・・・トリップ小説読むのは好きだつたけどな。体験はしたくないよ。

「あの・・・ここはなんていう国ですか？教えてください。」

99・99999%確信しても一応確かめちゃうのが人間です。ここでドイツだよとかイギリスさ！とか言われたら泣いて喜ぶ。いやそれでも十分おかしいけど。自宅から外国もおかしいけどね。

「ここはフェルバンティエって国だよ。この大陸一大きな国さ。」

さて、結論。

ここは異世界です。

だって私はいたって普通の高校生だつたから大陸で一番大きな国の名前くらいは知っている。でもフェルバンティエなんて国名聞いたことが無い。

「フェルバンティエ・・・。そうですか・・・。すみません私いまから突拍子も無いこと言いますが良いですか？」

さて現実を受け止めたら（まだあんまり受け止め切れてないけどね）この世界での協力者を得なければ・・・とゆ一ことで異世界からきたってことを話してみようと思う。だって私が知っている人はここでこの人たちしかいないだろつか。さっきも言つたとおり私は嘘が下手だから本当のこと言つしかないしね。私一回認めちゃえば

結構順応早いんです。それに割り切ることは得意だしね。

話すと決めたけど一応話す前に許可を取つてみた。拒否されたら終わりだけど。

「何を言つつもりだ？」

鬼畜男さんが睨み付けながら聞いてくる。

あ、さっきから全然触れてなかつたけどこの人ずっとといましたよ。んでずっと私を睨んでました。親の仇つてぐらい鋭く睨まれてました。でも触れても気分が悪くなるだけだから無視してました。このこと考えるとアネットさんと話すほうが有意義だしね！ あともう一人の男の子もずっといます。この子はさっきから私をガン見してる。穴が開くんじゃないかってくらい見てます。そして一言も発さない。謎な子だ・・・。

「いや、だから突拍子も無いことです。たぶん信じてもうえそうに無いから先に確認をとつてみたんですけど・・・。」

言つてもいいか聞いたのに内容を聞かれては確認の意味が無いではないか！

「話してみなさい。ちゃんと聞くから。」

アネットさん！あなたマジで女神です！！ああ・・・アネットさんがいなきときにトリップしなくてよかったです。そしたら普通に縄で縛られ「ースだつたもんね。本当に感謝です。

「えと・・・じゃあ話をさせてもらいます。どうやら私の世界とは

違つ世界から来たみたいなんです。」

意を決して私がそういうと

3人はびっくりした顔をして再び固った。

序章4

「・・・はあ？違つ世界だと？何を言つてゐるんだお前は。頭おかしいのか？」

復活を果たした鬼畜男の第一声がこれ。頭おかしいだとー？自分でもやう思うわつ

「私だつてそう思ひますよ。でも他に説明がつかないんですよ。私の住んでいたところにはフェルバンティ工なんて国無いですし魔法も使えません。この飲み物も飲んだこと無いです。はじめて見ました。」

「そんな理由で信じられると思ひつか？」

「思いません。でもこれが事実なんです。あなたたちも日本なんて知らなかつたでしょ？でも私はそこで生まれ育つたんです！これは何があつても変わりません！」

感情が高まつて思わず大声を出してしまつた。やつぱり女子高生は感情の起伏が激しいようです。いかんいかん。

「異世界？本当に？」

突然聞いたことの無い声が響く。
びっくりしてそっちを見るとさつきまで黙秘を貫いていた少年が口を開いていた。

「本当に異世界からきたの？ねえ本当に？嘘ついてないよね？違う世界から来たの？ねえどうなの？異世界からきたの？」

「う、うん。嘘ついてないよ。違う世界から来たよ。」

いきなり饒舌に喋りだした少年にビクビクしつつ答えると少女は

「じゃあちよっと待つてーすぐ戻るから。」

といつて部屋の奥に走って消えていった。

残された私たち三人は呆気にとられていると直哉がおりすぐ戻ってきた少年が一冊の本を手にしていた。

それでものすゞしい勢いでその本を差し出して

「異世界からきたならこれ読める？」

と言った。

「アドルフ、それお前がめちゃめちゃ大事にしてた本だろ？そんな怪しいやつに見せて良いのか！？」こつが言つてること嘘かもだぞ。

」

「うん。学校の先生にもらつた大切な本だよ。いま僕は異空間の研究をしていて先生にそのことについて相談したんだ。そのときこの本をもらつた。異世界から來た人が書いたものらしいけど文字がここで使われてるものと違つて読めないんだ。しかも不規則すぎて解説もできない。だから僕は異世界からきたっていう人がいるなら読んでもらいたい。」

アドルフくんが話す。

が、そのときの私はセリフの後半を聞いてなかつた。だつて異世界の人気が書いた本だと！？完全に私と同パターンじゃないか！なんかヒントがあるかもしれん。絶対読ませてもらおう！って考えていたからね。

「よ、読みたいです！その本読ませてください。」

私がものすごい勢いでそつこいつとアドルフくんは私に本を差し出した。

私は急ぎつつでも慎重に本を開く。

そこには見慣れた文字が並んでいた。

「これ日本語だ・・・。これ私の国の文字です！」

日本語の登場に感動して涙が出そうになる。少なくとも私以外にもここに来た人がいると思うとなんだか安心した。

「本当！？じゃあ読んでっ！早く」

感動していたせかされたので声に出して読み始める。

「えっと、『私がこの世界に来てもう2年は経つただひつ。今更だが記録をつける代わりに日記を書きたいと思つ。この世界に私が来たのはさつきも書いたように2年前だ。家でくつろいでいたらこっちに来ていたのだ。幸運にも村のすぐそばに落ちたので死なずにすんだ。だが、今でも、もし村の近くにある森に落ちていたら、と思うとゾッとする。私はやさしい村の人たちに拾つてもらつていま

もひつやつて生きている。本当に村の人たちにはよくしてもらっている。感謝してもしきれない位だ。早く恩を返せるようになりたいと思つ。』・・・・・ページ田はこれでお終いです。

読んでみて私とまったく同じだと思つ。私も本当に一瞬でひつて来てしまったのだ。おなじでホツとする反面2年も戻れてないと書いてあつたので落胆する。やっぱりすぐには帰れないらしい。

「そんなことが書いてあつたのか・・・。ねえ続きも読んでー！」

「アドルフは信じてるみたいだけだ俺はまだ信じてないからな。本当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だってあるんだ。」

「そういやまだ一人いたよーしかも一番手にわいのが。鬼畜男さーん！まだいますか！…もういいぢやないですか。せつかく信じてもらえる雰囲気だったのに台無しだよ。でも、この男のこつてることも一理ある。実際私が読めている保証などどこにも無いのだ。

「確かに私が読めている保証など無いです。でも本当に読めてます。信じてください」

私ができる」となんて信じてくれといつだけだ。あーあせめてあつんでききないよ。

「じゃあ書いてもらえばいいんじゃないかな？その本に載っている文字を。スラスラと書ければ彼女は本当にその文字を使っていたのだろう。今の短時間で覚えるのは無理だったろうし。」

そこでアネットさんが紙とペンを差し出す。

・・・ナイスアイデアー・アネットさんも「あなた最高です。本当にありがとうございました。」

私は受け取った紙にペンで『私は異世界から來ました』と書いてみた。

「書きました。どうでしょうか？信じていただけますか？」

もう本当にいい加減信じてほしい。そう思つていつもよりスラスラ書いてみました。

「・・・うん。字の形とか同じだね。なにより書きなれてる感じがあつた。『三一ク兄さん、彼女は異世界から来てるよ。僕が保障する。』」

アドルフくん！あなたも最高です！！

「・・・アドルフが言つたじや本当なんだろつた。普段こいつは
口数が少ないがその分嘘をつかねーから。・・・・・・・・・・・・
わあーつたよ信じるよお前の言つてよー。

うおー！感無量ですわたくし！とうとう全員が信じてくれました。長かった（？）戦いも終わりです。ありがとうございます鬼畜男！

「信じてくださいがどうぞ。」

「べ、別にお前のためじゃねえよつ……」

・・・・シノワレ。

序章4（後書き）

ビックリマークが多いですね。すみません文才がないから「いやつて」まかしてるんですけど（笑）読みにくかつたらこつてください。どうにかするので。

* * * * *

読んでくださつての方ありがとうございます。次でこの過去の話しが終わりになると思います。ああ、早く現在の話書きたい。

序章5（前書き）

泣きたいです。一回書いた原稿がきれいに消えました。
やつぱー田に2回更新なんて無茶しよつとあるからですかね・・・。

消えちゃっただけどがんばります・・・。

よくやく3人に信じてもらひことができました。

だがしかし、私の危機的状況は何一つ変わっちゃいない。あ、いや命の危機は去つたから変わったっちゃ変わったがこの異世界でどう生活していくかが何も決まってない。

ちなみにいま、私の頭に浮かんでいる案はアネットさん達に住み込みで働くことができるところを紹介してもらひことだ。今のところこれ以外浮かばないのでこれでいくしかないだらう。早速聞いてみるか！

とそこまで考えて時に気づく。

「私名乗つてなくね？名前いってなかつたよ。一応言つた方がいいよね。」

「あの、今更なんですが今まで名乗らずにすみません。私の名前は海野翔子です。海野が名字で翔子が名前です。」

「名字！？お前貴族なのか？」

鬼畜男さんが言つ。え？貴族？つちはバリバリの一般庶民です。

「いえ、違います。貴族なんて身分じゃないです。いっその世界では名字があると貴族なんですか？」

「ああ、名字は貴族様しか持つことができないんだ。どこでもう一回名前いつてもりえるかい？聞き取れなくてさ。悪いね。」

「あ、いえ。翔子とここます。しょ・つ・！」

「シラウマーーハ?」

「いえ、しょ・つ・！」です。」

「シラーーハ?」

・・・・・・・・・ビーナスの私のはじめの世界では発音でき
ないらしい。

「あ、じゃあシーツ呼べますかね？」

シーツてこつのは私のあだ名だ。海野の海から来ている。

海 = s e a = シーである。センスについては何もいわないのでくれ。
考えた友達が不憫だ。彼女は3日3晩考えた末にこのあだ名にした
のだ。

「シーカー?これなら問題ないね。」

よかつた。友達よ!こまこの前の努力が役に立ったぞ!—!

それでしまったが本題に戻ろう。

「アネッティさん、」のあたりで住み込みで働けるといひはあります
んかね?私でもできそうなもので。」

「え?住み込みで働くのかい?・・・・・・・・・・・・・・・・・・
一個あつたね。住み込みで食費免除で休日もあるといひが。」

なにその好条件！？好条件過ぎて怖いくらいである。

「ドリですかそこー？教えてくだわー！」

アネットさんはこやつと笑つて言つた。

「うー、アネット食堂モー！」

こつして私はアネット食堂で働くことになった。

ちなみにこの後ドミニクさんの猛反対劇とかがあつたけど割愛。
決してめんどくさいからじゃない。決して。

さらに私がお約束の、とくチートで魔力がいつぱいあつて制御に時
間食つたとか、その制御法を教えてくれたのがドミニクさんで結果
仲良くなつたとか、アドルフくんが天才過ぎて王都にあるこっちの
世界で言う大学に飛び級で学費免除で行くことになつたとか、あつ
たけどそれも割愛！

うん、結構大事なことだったね。割愛しちゃつたけど。

一応補足しておくといまや我とドミニクさんはめちゃくちゃ仲良し
だ。私は何があったらまずドミニクさんを頼るねつてくらい仲良く

なれた。鬼畜界つて書ひたのが懐かしごくらじだ。

アドルフくんは王都に先月行つてしまつたが1週間おきに手紙が届くし、私とは念話という私オリジナルの魔法でほぼ毎日話しているので寂しくはない。

まあそんなこんなで海野翔子こと、シーは異世界ライフを堪能（？）しつつ元の世界に変える方法を探しています！

序章5（後書き）

おわった！過去編終わりました！！

データ消えた時は泣きたがりでしたが無事過去編終わりました。

これから現在が始まるので読んでくださいといつれしこです。

「今日はお疲れさん。夜は特に忙しかつただろう?大丈夫かい?」

仕事が終わつて夜、アネットさんが声をかけてくれる。

今日はアネットさんが言ったとおりものすごく忙しかつた。なんでも町の騎士団の給料日だつたらしくてみんな外食にしたらしい。食べ盛りの男共がわんさか来て疲れました。

私は厨房で働かせてもらつてるのでめんぢくさい騎士たちの相手をしなくてすむがフロアのほうで働いているマリーさんとフェイトさんは大変だつただろう。ああ、マリーさんとフェイトさんというのはアネット食堂の従業員さんのことです。お二人とも美人で優しい。お菓子をくれるいい人です。

そして騎士たちは隙あらばフロア担当のお2人を口説く。なんでも出会いが全然無いらしい。私もヘルプでそつちに出たときにもううんざりするくらいお世辞を言われた。アレは本当に鬱陶しかつたなあ。日本人は褒められ慣れてないんだよ。耐えている2人はすごいと本気で思う。

あ、ちなみにドミニクさんもこの騎士団で働いています。でも彼は実は彼女さんがいるので口説いたりしてませんよ。

そんで私はさつき書いたとおり厨房で働かせてもらつてます。元より一人暮らしだつたんで料理は得意だつたんです。さらに前作つみてといわれたので作つてみた私の世界の料理がアネットさんの舌

をつならせましてそれ以来店のメニューに入りました。よつて私は
ロックさんです。1年前は女子高生だったのにな・・・。

今のところメニューに入ってるのはシチュー（ひょりと意外なこと
にこつちにはシチューが無かつた。スープは普通にあるナビ。）と
肉じゃがもどき、プリンもどきにアイスもどきである。
なぜシチュー以外「もどき」が付くのかといつと地球とは食材が違
うからである。

ジャガイモなんて無かつたのです。なので肉じゃがもどきにはジャ
ガイモと食感はまったくおんなじなのに色が青色って言つなんかも
のすごい野菜“ヒユーレ”を使ってます。なので肉ヒユーレになつ
ちゃうのだ、本当は。

それはなんか嫌なのでそのままの名前でやつているけど時々みんな
に「じゃがつて何?」って聞かれる。そのたびこまかしてるナビ。
つつこんじやいけないことも世の中にはあるつてことです。

私的にはアネットさんの料理のほうがおいしんだけどねー。私の
雑な料理より確実に。アネットさんの料理はマジ神です!どんなに
お腹空いてなくとも食べれちゃうんだからもう魔法だよね。

あ、そういう魔法といえば私はもう一個お仕事します。チートな
能力を使って魔法で便利屋さんを。

魔法がなければ解決でき無そなことを解決するのが仕事内容。
小さな女の子から依頼で木のてっぺんに引っかかった帽子をとつて
くれ、から騎士団の依頼で町に盗賊が来たので捕らえるのをつだ
つてほしいなど、ものすごく幅の広い便利屋をやつてます。

これをはじめたのはせっかくあるチート能力を生かしたかったのと
アネットさんにお世話になりっぱなしだったので食費ぐらい入れた
いと思つてだ。はじめて半年たつが結構好評である。

「それでシー。あんた昨日や今日から戻りたいって言つてたけどつけたのかい？」

「アネッタさんと再び話しかけられる。

「ほえ、田記……あー、忘れてた……」

「え、えへ、忘れてました。今から書いてきます！そのまま寝ちゃうかもしないんでおやすみ言つりますね。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。私ももう寝るかな。じゃあ田記もみんなへ頼むね。」

「はーい！」

階段を駆け上がりながら返事をする。

私の部屋は3階建てのアネッタさんの家の最上階、3階である。前はアドルフ君と相部屋だったけど今はアドルフくんがいなくなつたので一人で使つている。

んでその向かいにある部屋がドリーフさんの部屋。2階はロビングとアネッタさんの部屋がある。1階はもうひと部屋だ。

階段を上り終えて部屋のドアを開ける。

私は机の上にあったあるパンとノートを手に取った。

もう一年経っちゃったけど私は日記をつけることにした。もし私が
たいな人がまた来た時の為にだ。私はあの異世界人の日記のおかげ
で生きていくといつてもいいくらい日記に恩があるので私ももし役
立つたらと思って書くことにした。

本当はもっと前からそう思っていたのだが、なかなか忙しく書き始められなかつたのだ。

「さて、タイトルは何にしよう?」

一人なのをいい事に独り言を言つてみる。だつてなんか喋つたほう
が思いつきそうだったからね。

「うーん、どうせならそのタイトルだけで内容がわかるようにした
いよなー。うーん・・・・・」

私は悩む。タイトルなんてそんなに大事じゃないんだがなんだかこ
だわつてしまつ。

なんとなく私のシーとつあだ名に『3月3晩悩んだ友達の心がわか
つた氣がした』

「うーむ・・・・よしつーこれにしよう。」

私は日記帳の表紙にでかでかと日本語でタイトルを書く

『異世界トリップ者の異世界奮闘日記』

「よしーあんだけ考えて結局なんのひねりも無こなじめしこう」
「わたくし早速書くかな、中身。」

こんな風に日記を書き始めた頃の私は知る由も無かった。
この平穏であたたかな日常に終わりが来ることを。

表紙～タイトル～（後書き）

すみません。サブタイトル変えることにしました。この話を表紙にして次から1ページにします。前の話は過去編1とかに変更します。急にすみませんでした。

その訪問者は本当に突然やつてきた。
そして私の平穏な日常を崩していったのだ。

その日は私が日記を書き始めて10日くらい経った日だった。

「シーチャーん…今度俺とお茶しようよ。わたくしん俺のおじいさんですわ。

」

「おじいとか言つて後悔しても知りませんよ。私ものすいこ食べる
からー。ハイツ！肉じゃが定食です。わかつちゅうと食べて仕事行
かないと怒られますよ？」

「う、こんなときまで仕事の話は出さないでくれよ。食事の時まで
あの地獄の訓練を思い出したくなー。」

そうこうして青ざめた唇の一人、騎士のロウカフと軽口をたたきつつ次
の料理を運ぶ。

今日はフェイトさんが風邪を引いてしまったためお休みで私もフロ
アのほうも手伝っているのだ。おかげで歯の浮くようなお世辞を言

われすぎてゲッソリです・・・。

このロウフにもお茶に誘われたがもちろん断りました。めんじくさいしね。まあロウフ相手だつたら気が楽そうだけど。こんな風に軽口たたけるし。にしても今日も騎士が多い日だなー。給料日はこの間あつたばっかなのに。もう忙しいんだよ騎士がいると。

そんな感じで忙しいけど和やかな雰囲気だつたのだ。

だが、次の瞬間この雰囲気がぶち壊しになる。

ガチャーン！－リリリリリリーノ

急にものすごい勢いで店のドアが開けられる。リリリリリリーノンはドアの上についているベルが鳴る音だ。地球上にもあつたけどこっちにあるなんて最初は驚いたものだ。普段普通に開けるときはリーン位しか鳴らないのに今のはものすごい鳴ったなオイ。つーかその扉は寿命が近づいて来てるから勢いよく開けられると壊れるかもなのよね。壊れたらどうしてくれんのよと思いつつと文句言つてやろうとしたの勢いよく開けた主を見てみた。

そこには童話に出てくる王子様たちも裸足で逃げ出すよつなめちゃくちゃ美形の王子様がいました。

私はそのイケメンぶりに睡然としつつもその王子様を観察する。

格好は王子というよりは騎士に近い感じの服装であった。帯剣しているし。ちゃんと防具つけているし。でもそこにいる唖然としていてアホ面のロウフとはまた違った感じである。なんか「ひめ」と高貴な感じ。王様に仕えていそうなイメージである。

この服装も十分すごいが顔がさらにすごかつた。いい意味で。豪華な服装に負けないくらい、というか服装を見事に引き立て役にしているくらいのイケメンだ。髪の色は金髪で目は碧眼。あーのラインはスッとしていて鼻筋も通っている。町を歩いていたら10人中10人の女性全員が振り返りそうなくらいの美形だ。

はー・・・まさに王子だわー。とか考えながら声をかけてみる。

「いらっしゃいまーせー。お一人ですか？」

声を掛けられたことに気づいたのかその王子が振り返る。そして私を見て一瞬目を見開いた。

ん?なんか驚かれるような格好はしてないけどなー。

と思っていたが一つ私はこの世界の人と違うところがあつたのを思い出した。

あーあのこと思われてるのか。なら先手を打つといつと思ふ声を出す。

「あの、驚かれているようですがもしかしたらこの黒い髪の毛と田のことですか?この2つは生まれつきなのでもし気分を害されたなら申し訳ありませんがほかのお店に・・・・・はー?」

私がセリフを中断したのには訳がある。なぜだか知らんが王子(仮)がいきなり私に跪いたからだ。

え？ なに？ 何やつてんのこの人？

周囲もいきなりの行動に唖然とする。

「あ、あの何やつてるんですか？ 顔上げてください。」

私がそういうと王子（仮）は顔を上げて言った。

「我らが巫女姫様みこひめひめさま、おかえりなさいませ。僭越ながらわたくしがお迎えにあがりました。さあ城に戻りましょう。」

・・・・・・・・・・・・・・は？」こいつがうしたの？

巫女？ 姫？ 何を言つてるんだ王子（仮）よ。

周囲の心が一つになつた瞬間である。

1ページ（後書き）

主人公は騎士たちの言葉をお世辞だと思つてますが実際、彼らは本気で言つてます。特にロウフは本気です（笑）

シーコと翔子の見た目は黒髪、黒目で髪は腰ぐらいまで伸びています。また身長は152cmとちょっと小さめですがスタイルもよく出るところ出でます　顔もかわいいです。

なのでモテるんですが気がつかない彼女・・・。

騎士たち、不憫！（笑）

巫女姫つて何言つてんのよこの人は？王子みたいなイケメン顔の癖に頭大丈夫か？つて顔は関係ないか。つーか跪かれたままだし・・・。とりあえず今の状況だと彼じやなくて私がいたたまれない。だつてはたから見れば私つてすごいイケメンを跪かせてる悪女つぽいじやないか！とにかく現状打破のために声を掛ける。

「あのー私巫女姫? なんてものじゃないですよ。人違いじゃないですか? それとあの、立つて下さい。」

そう言えば王子（仮）は立ち上がりながら

「いえ、その漆黒の夜の闇のような御髪と御眼をお持ちな貴方様が巫女姫でない訳が無いです。さあ巫女姫様、お城に参りましょう。」

۱۰۷

違うつていつてんじやん！つーかなんだその黒色をあらわすだけなのにいっきい言葉並べやがつて。御髪と御眼なんて使う人はじめて見たわ！分かりにくいわ！目と髪でいいだろつ！しかも城に参りましょうつて結構強引だなオイ。どんだけ城行きたいんだよ！！

とカイレントシッピングをつくる。瓶詰めはこんなによ?チキンだから。

「いや、だから違いますって。私普通の町民です。」

「いや貴方様は巫女姫様です。」

「いやだから違つてば！」

「そんなことばっかりません！貴方様は巫女姫様なんですよ……いい加減お認めください……！」

「あーもうひだから！私は巫女ひ「シー、落ち着きな。」「アレン、冷静になれ」

私のセリフに2つの声が入り混じる。

一つは聞きなれたアンネットさんの声。

もう一つは聞いたことの無い男の人の声。

その2つの声に反応して私たち2人も動きを止める。

「シー、とりあえず落ち着きなさい。そこの騎士様も。」

アンネットさんに言われて私は急に恥ずかしくなる。だつて店にお客さんがまだいたからね。今の見られてたのかー……うん、恥ずかしいね。

とゆーかこの人やっぱり騎士だったんだー。王子顔なのに……。

「こきなりうちのものが暴走して失礼した。非礼をわびよう。それで我々はそこにいらっしゃる方に話があるんだが、お借りしても？」

さつきの男の人の声が食堂の入り口から響いた。

慌ててそつちを向くと、そこにもイケメンがいました。

服装はそつきの王子（仮）と同じで、髪の色が紺色だつた。目の色は緑でこれまた顔が見事に整つてゐる。そつきの人もこの人も2人ともイケメンでかつこいいんだけどタイプが違う感じ。

この紺色の髪の人はなんかこう美人なかんじである。かつこいいし美しいんだけど明らかに自分より綺麗だから隣に並びたくない感じ。神秘的な雰囲気がある。

つてイケメン観察してる場合じゃないよね。質問されてるんだから答えねば。

「いえ、別にお気になさらず。私もですから。でも今、話というのはちょっと無理です。仕事中なので。食堂が9の刻に終わるのでその時いらしてくれますか？」

そつちが勝手に訪ねてきたんだから時間ぐらに融通しりよオラつていう意味をオブラーートに包んでみた。これなら失礼じゃないよね・？

「了承した。ではまた9の刻に訪ねさせていただく。いきなりすまなかつた。」

それだけ言つとイケメン2人は去つていきました。

・・・なんだつたんだあの人たち？

なぜだか分からぬが私はとても不安な気持ちになつた。

なんだか急に歯車が狂い始めたような、なんともいえない気分にな

つたのだ。

何事もなく終わればいい。どうせ人違いだよ。

そう言い聞かせて扉のほうから呆然とした空気が漂つ食堂内に戻った。

2ページ（後書き）

9の刻じくって言うのは9時のことです。時間はこいつと同じで24時間制になります。ただ9時とは言わずに9の刻といいます。6時だつたら6の刻です。

何分って言うのは単位がなく12時30分の事だつたら12の刻の30といいます。

といつてもこの世界の人たちはほとんど太陽の沈み具合で時間をチエックしてるのであんまり時計とかは普及してません。貴族が懐中時計持つてるくらいです。

サイレンストラッシュロミは心の中で突っ込みです（笑）彼女チキンなので声には出れないんです。

「先ほどはまことに失礼いたしました。つい、巫女姫様を拝見できることに喜びを感じ冷静さを失つてました…。」

アレン、と名乗った騎士は名乗り終わった直後にそんなことを言った。

まだ引きずるのかソレ。

今は9の刻。私は瞬間にきなりやつてきた騎士さん達2人と向かい合っている。

この2人が去つた後食堂内はすゞい騒ぎだつた。

大丈夫か?と心配してくれるみんなには「きっと人違いだから大丈夫!心配しないで」と言つたが実際めちゃくちゃ不安です。つか怖い。チキンですから!!

一応騎士であるロウフから聞いた話によるところの人たちは王城に仕えている騎士で、その中でもトップの1番隊の人たちみたいだ。なぜ1番隊か分かつたかというと何番隊かは防具で見分けがつくみたい。

ああ、そんなお偉い方が私に何のようなのよ、マジで…。

内心ビックビクしながらもそんな様子は表には出さない。あんたたちなんかビビッてませんけど?っていう雰囲気をかもし出す。これは食堂で働くことになったときにアネットさんから教わったこと

だ。どんなに怖い客が来ても決して表には出せない」と。田舎では、まつたらなめられるからだそつ。

私はそんなことを思い出してちょっと遠くのほうに座っているアンヌトさんをチラッと見る。

そうしたらアナネットさんは私を安心させるように微笑んでくれた。隣にいるデービークさんも頷いてくれる。

そんな2人を見たらだいぶ落ち着くことができた。よし、とりあえづ誤解をとこう。

「いえ、先ほども申しましたがお気にならないで下さい。私もでしたから。それと何度も言つますが、私はただの町民です。巫女姫様と云つようなものではござりません。」

ちゃんとハッキリ言えたー！これで大丈夫だろ？。だいたいさー私はトリップしてきたわけで召喚された訳でもないんだしそんなねえ。大層なお役目なんて無いでしょう。小説でも勇者とか姫とかは大体召喚されてたしー。

そう思つていたらさつきレイと名乗った騎士さんが口を開いた。

「いえ、あなたは巫女姫なのです。黒い瞳と髪をお持ちだから。」

またでたよー黒髪と黒い目。確かに私は目も髪も黒いけどだからなんわけ？日本には山ほどいるわー！なのにそれ持つてたら巫女姫って単純すぎないか？とゆーかもず、巫女姫って何？そもそも疑問が脳内を渦巻く。

「あのやつから黒髪と黒い目のことと言つてますけど何なんです

か？あと、巫女姫様って何なんですか？」

思つたことをそのまま口にしてみる。気になつたことがあつたらすぐ聞かないとな。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥さ。

すると今度はアレンさんが話し始める。

「そうですね・・・。巫女姫様がどんなお方かを説明することになると少し長くなってしまうんですが大丈夫でしょうか？」

確認を取るほど長い話なのかよ。どんだけ長いんだよ。と再びサイレントツッコ。でも聞かなきや始まらないんで聞くことにする。

「大丈夫です。お願ひします。」

私がそうこうとアレンさんは頷いて話し始めた。

3ページ（後書き）

巫女姫についてを入れようとしたらめちゃめちゃ長くなってしまつたんで2個に分けました。次回、巫女姫が何なのか、とか翔子は本当に巫女姫なのか？とかが分かります！ 多分

4ページ（前書き）

今回、長い上に説明チックです・・・。すみません。
流し読みでも多分きっとおそらく大丈夫です！

* * * * *

昔、昔、ある王族に女の子が生まれた。

彼女はこの世界を作った神と同じ黒い目と黒い髪を持つていた。

彼女はとても成長が早く4歳にして高難易度の魔術を扱い、周りの人たちから神の御子といわれ称えられた。

彼女は周りに応えるかのようにどんどん成長していく。

10歳になるころには彼女に魔術で勝てるものは誰もいなくなつた。

周りの人たちはさうに彼女を褒め称え、畏れ、敬つた。

13歳の頃、彼女は自分の様々な能力をみんなのために生かしたい
と思った。

彼女はそれから毎日神様に祈りをささげていた。

世界が平和になるように、みんなが幸せに生きていけるように、と。

その姿から彼女は神の遣いの巫女のようだといわれ、彼女は巫女姫
様と呼ばれるようになった。

そしてそんな彼女は祈るだけでなく、行動を起こした。

まず、彼女は自国の腐りきつた王宮を改革した。

彼女が16歳になつた時だつた。

次に、彼女はこの世界から戦争をなくそつと努力した。

彼女の努力のかいあつて全てとはいかないが戦争はこの世界からほとんど姿を消した。

世界の人々は彼女に感謝した。様々な品を送り、感謝の気持ちを表した。

そして、それと同時に彼女を追い詰めた。

『もつといじつしてくれ』『何でその国ばかりかまうのか』『神の御子ならこのぐらいできるだろつ』といいまつと多くのものを求めた。

彼女は徐々に追い詰められていった。

なぜなら彼女は人間だつたから。

彼女はちょっと人より魔術の腕が優れていて、髪と目の色が黒い、正義感のある人間だつたから。

でも、そんなことを理解してくれる人などほんの一握り。

次第に彼女の心に傷がついていった。

ある日、彼女は決意し世界中の人々に向けてこう言つた。

「私は、ただの人間です。貴方たちと同じ人間なのです。神の御子などではございません。人間なのです。なので、こうしてほしいと言ふ貴方たちの願望を全てかなえることはできません。もちろん努力は致します。ですが無理なこともあるのです。どうか理解をしてほしい。」

彼女は混乱を招くかもと思ったが、自分が本当に壊れてしまう前に

みんなの理解を得ようと、まだちゃんと自分を保っているうちに理解してもらいたいお互い分かり合えるように、と思いをこめて言つた。

しかし、人々の反応は彼女を裏切つた。

『今さら神の御子じゃないなんて騙していたのか』『なんて無責任なの』『私たちを見捨てるのか』

人々にとつて彼女が世界のために死ぐのは当たり前になつていたのだ。

彼女は本当に壊れてしまった。

彼女は本当に理解してくれている人とも会わなくなつっていた。一人部屋にこもり、祈りを神にささげるだけの生活になつっていた。

ある日、彼女がいつものように祈りの間で祈りをささげていると、どこからか声がした。

人間は愚かだね。君は彼らを助けたいと思うかい？人はこの世に必要か？

突然の声に驚きつつ、彼女は答えた。

「確かに、人は愚かです。でも、そうだとして私は彼らを助けたいです。・・・・・ですが今の私にはそれができません。心が壊れてしまったから。今の私はもう彼らを信じることができないのです。そんな私が助けるなど・・・。」

・・・そうか。では君が助けたいと思うなら、私は彼らにチャンスをやることにしよう。人を滅ぼすのをやめる。君に免じてね。それには君の協力が必要なんだ。協力してくれるかい？

彼女は「はい」と答えた。彼女はこの声の主が神であることはなぜだか自分でもわからないが知っていた。

次の日、彼女は再び人々に声を飛ばした。

「私は、この世界が好きでした。でも今はこの世界を、人々を信じることができます。なので私は1回休みます。

昨日、神様から私はお言葉をいただきました。私を違う世界に飛ば

してくれるそうです。私は200年間その世界で過ごします。貴方がたは200年間で、私が信じたいと思う世界にしてください。200年後、私は今の私とは変わってしまうかもしれません。でも必ず戻ってきます。

もし、再び私が信じられる世界になっていたら神はこの世界を一生守護してくれるそうです。

・・・・・では200年後までさよなら。私の愛すべき世界よ。」

こうして彼女はこの世界から消えて別の世界に去っていった。

人々ははじめは彼女が裏切ったと罵っていたが、すぐに気づいた。

彼女の存在の偉大さに。

彼女が消えたら、世界の国々はすぐに諍いを起こした。仲介してくれていたパイプを失いまた戦争が繰り返されそうになった。さらに彼女が張っていた結界がなくなり、魔物と争うことも増えた。世界は再び混沌の中に落ちた。

しかし、人々は彼女の言葉を思い出した。

そして決意した。彼女に信じてもらえる世界を作ろうと。

そして、その日から199年が経つたある日、突然祈りの間で祈つていた神官長に声が届いた。

来年、巫女姫をこの世界に召還する。黒髪で黒目の人者がいたらそいつがそうだ。場所までは特定できないが絶対見つけ出してやれ。

神官長はすぐさま王に報告した。王は秘密裏に彼女を探す計画を立て、実行した。

そうして見つけたのが貴方様なのです。巫女姫様。

* * * * *

アレンさんの話をまとめるとこんな感じだった。うん長いね。
これでも十分長いけどちゃんと略したんだよ？

だってアレンさんの言い方いちいち長いからさ、これの倍くらいの文章になっちゃって・・・。聞いてるほうも疲れた・・・。

さて、この話を聞いて私がまず思ったこと。

これ絶対私じゃねー！こんな聖人みたいな性格してねーよーーー！

思つひじがこれって自分で悲しくなった。

「納得していただけましたか？黒髪と黒い目が持つ意味を。貴方が巫女姫様であることを。」

レイさんがいい。

うん、そうだね。納得したよ！

「そのお話は理解できましたが、自分はそんな素晴らしい方じゃありません。」

・・・ええそうです。何度も言うように私はチキンなんです。サイレントツツ「ミしかできないのですよ・・・・・。強そうな騎士2人を前にしてそんなことがいえるわけが無い。

「いやいやそんなご謙遜を・・・。巫女姫様は十分素晴らしいです！さあ巫女姫様、王城に向かいましょう。」

「おい！だれかこの話の通じない騎士がいるからしてくれー！
どんだけ王城行きたいのこの人・・・。

そういうや、話を聞かない騎士（名前で呼ぶのもいやなので名前消去）の言つていたことと私の人生では矛盾というか辻褄があわないところがあるよね。

「だいたい私はまだ17歳です。200年つておかしくないですか？」

私はまだピッチャピチの10代ですもん。200歳も生きてない！つか日本で200歳まで生きれたらテレビ出れるぞテレビ。

「それほんの世界と時間軸が違うからだ・・・・です。」

だですか？あ、レイさんとつづりの敬語じゃなくなってきた。最初からこの人敬語苦手そうだと思つたけどつづりのボロが出てますね。無理してゐるなあー。

じゃあ彼のことは敬語で話せない騎士でいいや。

つてそつちぢやなくて、時間軸のほう。・・・ですが異世界としか言えないナビ。じゃあこっちの1年間と地球の1年間だと違つて事か・・・しかもこっちのほうが長いのねー・・・
つて、ん?じゃあ私つてめちゃめちゃ年といつてない?帰つたとして
も・・・・・・・

「えー?それつてじゃあ私が地球に帰れたとしても私めちゃめちゃおばあさんになつてるわけ!?」

思わず自分の思考回路にびっくりして声を上げる。

「まあそつなりますね。でも巫女姫様は元々」こちらの人間ですのでお戻りになる」とは無いかと・・・。」

話を聞かない騎士が言つ。

そつかー帰らないなら安心!

つて違う。ノリツツノミしてゐ場合ぢやない。

急に頭の芯がスウッと冷えてくる。

帰らない?それはつまり

「そ、れは要するに帰れないって事・・・・?」

声が震えてしまつた。私地球に帰れないの?

敬語で話せない騎士があつさうと答えた。

「ええ。おそらくもうあちらに行く必要は無いと思われるのでもちらの世界には行かないかと。・・・・・み、巫女姫様!?.ビシリに!?

話の途中だつたが思わず駆け出してしまつた。

全力で階段を駆け上がつて3階まで行き自分の部屋に入る。

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・・。」

この世界に来てからはだいぶ体力がついたと思っていたのに階段駆け上がつてだけで息が切れていた。

まあ今聞いた話が衝撃的過ぎて体がおかしくなつてゐるのかもしれないが。

ドアに鍵を掛けて座り込む。

あの騎士たちは私が帰らないといつていたが、つまり帰れないのだろう。

「私、帰れないの？ 地球に」

思わずつぶやいた。

この1年間アンネットさんのところで働きながら帰る方法についていっぺい調べた。

あの私を救つてくれた日記を書いた人を探したり、町の本屋さんに行つたり、たまに来る旅人の人に話を聞いたり、ちょっと危険だつたけど冒険者の人にも話を聞いた。

結局帰る方法は見つからなかつた。

でも誰も絶対にそんなことは無いって言わなかつたからきっと帰れるつて信じていたのに。

信じていたのに・・・・・・・・。

「・・・・・ああ、かえれ、ないんだ。もう帰れない。戻れない。」

言つている途中で涙ぐんでくる。

もう帰れない。戻れない。地球にはいけない。

声に出したせいか、そんな現実が一気に襲いかかり堪えていた涙が流れ出す。

私は声の大きさも気にしないで大声で泣き続けた。

5ページ（後書き）

今日は後半シリアスですかね・・・？その「つえ短い」・・・。

前回説明チックだったので今回面白くしようと思つてたのに失敗ですー・・・。

ああ・・・早くコメ【ディーっぽい】のが書きたいです。

どのくらい時間が経つたのだろう？

あれから私はずっと部屋で一人泣き続けていた。

泣いたつて仕方ないと分かっていても涙は止まらなかつた。

もう軽く3時間はたつた気がする。いい加減泣き止まなきやなと思つていたら部屋のドアがノックされた。

「シー、温かい飲み物を入れたから飲みにいで。」

アネットさんが優しい声でそれだけ言い、下におりていった。

アネットさんのその声を聞き、これ以上心配かけてはならないと思いつにおつむ事にした。

あー、目死んでるだろ? まぶたがやばいもんな。などと考えながら階段を下る。

下り終えてリビングに入つたら直ぐに

「シー！ 体冷えてないか？ 上は寒かつただろう？」

と、ドミニクさんが声をかけてくれた。

下手に大丈夫か？なんていわずに体の心配をしてくれる彼の気遣いがうれしくて再び涙腺が緩みそうになる。

「うん。平氣。ありがとう。」

そういうとアネットさんがキッチンからやつて来てカップを3つトーブルに置いた。

「平気なんていつてるけど冷えてるに決まってるだろ？ せひ、早く飲みなさい。」

そう促されて私は椅子に座った。

田の前で湯気を立てているチョコルという飲み物を飲んだ。そういうこのチョコルって私がこの世界に来たときにアネットさんが入れてくれたココアみたいな「コーヒー」だ。そんなことを考えてまた思考が地球のことに向いてしまった。

これじゃダメだ。そう思つて思考を切り替える。状況を確認してアネットさん達と話し合わなきゃ。

「あの騎士たちは帰つたの？」

「ああ。お前が部屋に行つて一刻ぐらい粘つてたがその後帰つたぞ。また明日来るつていつてたが・・・。」

また来るのか・・・しつこいな本当に。明日来るつて事はそれまでに考えをまとめなきやつてことだな。それも急がなきやだけど、とりあえずはアネットさん達に謝りう。心配かけたし迷惑もいっぱいかけた。

「あの、ごめんなさい。心配も迷惑もいっぱいかけて・・・。」

そういうたら2人は笑いながら

「そんなの当たり前だろ？ 家族なんだから。」

「そうさ。別にいいんだよ。家族に遠慮なんて要らないんだ。それに迷惑なことなんて無いよ。」

と言つてくれた。

ああ、なんていい人たちなんだろ? この人たちのところに落ちてよかつた。心からそう思える。

まあ最初はドミニクさん怖かつたけど。

「2人ともありがとう。それでこれから的事なんだけど、したらいいかな・・・」

「うーん、そうだな。お前はどうしたいんだ? それによつて変わつてくるぞ。シーは地球だけか? に帰りたいのか、このアネット食堂にいたいのか、王城に行きたいのか決めなきやな。お前が好きな選んでいいんだぞ。なあ母さん。」

「ああ、もちろん。シーがしたいようにしなさい。私達に気を使わなくていいんだよ。」

ああもう、この2人は私を泣かせたいのかね・・・。優しい言葉ばっかりで泣きそうだ。せつかく泣き止んだのに。

決めた。本当は黙つてるつもりだつたけどやつぱりこの2人には私の本当のことを聞いてもらおう。今まで誰にも話していないが、この2人には聞いてもらいたい。

「アネットさん、ドミニクさん。私、正直どうしたらいいか分からぬ。だから2人にも相談に乗つてほしい。それには2人に私の地球にいた頃の話を聞いてもらわなきゃなんだけど、長くなっちゃう

し聞いてて気分のいいものじゃない。それでも聞いてくれる?」

2人は直ぐに

「「もちろん。」」

と声を合わせていった。

私はそれを聞いて一呼吸置き話しが始めた。

私の重い、許されない罪について。

6ページ（後書き）

再びシリアス風味・・・

早くコメディーにしたいのに次もシリアス確定・・・・・・・・

ああ、愛しのコメディーよ（笑）

すみませんがもう少しだけお付き合いください。

次回は翔子の地球にいた頃の話です。

私の家はいまだ珍しく昔、華族だった家みたいでしきたりとかがいっぱいあった。

私はそんな家の本家の次女。まあ本家の娘といつても私はお父さんと浮氣相手の人の間にできた子だつた。要するに妾の子だ。なのでお母さんには好かれていなかつた。

でも私にはとっても大好きな兄弟がいた。お兄ちゃんとお姉ちゃんが1人ずつ、双子の歳の離れた弟が2人。4人とも妾の子の私にも普通の兄弟のように接してくれていてとても仲がよかつた。

華族、といつてもお家継ぐのはお兄ちゃんだったので私は普通の人と変わらない生活を送つていた。

お兄ちゃんもお姉ちゃんもとっても優しいし弟たちはかわいいし、お母さんには恨まれてたけど幸せだつたと思つ。

でもそれも全て私が壊した。

高校生になつた年、私は誰からかストーカー被害を受けた。最初の頃は視線を感じるなー位だつたけどそのうち無言電話がかかって来たり物が盗まれたりした。

はじめのうちは我慢できただけどそのうち怖くなつて一番頼れる大好きだつたおにいちゃんとお姉ちゃんに相談した。2人は薄々私の周りの様子が変だと思ってたらしくけつゝど聞こうと思つてたらしい。タイミングよかつたねー！とか言い合つて笑つた。

次の日からお兄ちゃんが学校に迎えに来てくれるようになつた。私は大好きなお兄ちゃんが迎えに来てくれるのが嬉しくていつもはしゃいでた気がする。

ストーカーの事も考へないで。

お兄ちゃんが迎えに来てくれるようになつて2週間が経つたころストーカー被害はだいぶ無くなつてお姉ちゃんと2人で喜んだ。

被害が無くなつてから1週間後。

その日はたまたまお兄ちゃんが忙しくて迎えにこれなかつた日だ。お兄ちゃんから『迎え行けなくてごめん。』ってメールが来ていてちょっとびり残念だなつて思つたのを覚えている。
だから友達を誘つて近所に新しくできたクレープ屋さんに寄り道してから帰つた。

友達とクレープの感想を言いながら道の途中で分かれて門限に遅刻しそうだつたから小走りで家に向かっていた。何とか間に合いつつと思いながら道の角を曲がつた。

そこで目にしたのは猛火に包まれた我が家だった。

理解ができなかつた。

ナニアレ?何で燃えてるの?何があつたの?

呆然としてそう考へていたら近くから声が聞こえた。

「『の火事つて放火らしいわよ。」

「まあ、物騒ね・・・。そういえばまだお兄さんとお姉さんは救出

されて無いんでしょう? 大丈夫なのかしら・・・。」

お兄ちゃんとおねえちゃんが?

その言葉を理解した瞬間私は駆け出した。

消防員の人人が止まれと叫んでいるけど無視して燃えている我が家に入り込んだ。

中はすごい煙だった。家も今にも崩れそうなほど燃えていたが私は中に入つていつた。

無我夢中で突き進んでいたら居間にお兄ちゃんとお姉ちゃんがいた。

2人は倒れていた。
もう動けない姿となつて。

その2人を見た瞬間私は氣を失つた。

次に目が覚めたのは病院だった。

生きてたんだと思い、呆然としていたら病室にお母さんが入つてきた。

そして目が覚めた私を見て近くによつて来て私の頬を思い切り叩いた。パンと乾いた音が響いた。
私がびっくりして何もいえないでいたら母は話しだした。

「貴方のせいよ・・・・・貴方のせいで孝之と桜子が――」

私のせい
・
・
・
・
・
?

「貴方のストーカーしていた男が火を放つたのよ！ 貴方さえいなければ2人とも死なかつたのにっ！！！ 家も燃えなかつたのにっ！ 妾の子の癖にうちにいつまでも家に居座つて！！ あんたが、あんたが死ねばよかつたのにっ！！！」

母がそう叫んでいたら看護婦さんらしき人が入ってきて母を連れて行つた。

こちらを心配そうに見ていたかその時の私はそんなのどうでもよかつた。

大好きだつたお兄ちゃんとお姉ちゃんが死んだ。

ストーリー男の放火で

私のストーカー男の放火で

私が殺した？

その後のことは覚えてない。

気づいたらまたベッドで寝ていた。

それから2週間後私は退院した。病院にいるときも退院してからも私が泣いたのは病室で兄と姉が死んだことを聞かされたときのみだ。それ以降私は泣けなかつた。

そして退院してから1週間ほどで本家を出て一人暮らしをはじめた。家を出るとき誰も私に何も言わなかつた。でも私も悲しくも無かつた。笑つて家を出た。

半年たつてようやく一人暮らしになれた頃、いきなりこの世界に来たのだ。

* * * * *

「つていう感じだつたんです私の地球の頃の生活。なので別にあつちの世界に急いで戻りたいわけじやなかつたんですよね。だからゆつくり戻る方法を探していたんです。ですけど今日、戻れないつてハッキリ言われたせいで思わず泣いてしまいました。びっくりしちやつたんで・・・」

そういうつて笑つて話を締めくくつた。

黙つて話を聞いていた2人は私を見て悲しそうな顔をしていた。

「あーもう、シーのバッカ野郎！！泣きたかったら泣けばいいんだ。無理して笑う必要なんてねーんだよっ。」「ドミニクさんが怒りながらいう。

泣きたい？

そんなことは無い。私は泣きたくなんて無いのだ。

「私、別に泣きたくないですよ？大丈夫です。」

「へへ」と笑つて言つとデリックさんはさらに怒りながら言つた。

「なあ——にが泣きたくないだよ！そんなつらそうな顔しやがつて。あのなあ、どうせお前のことだから自分が殺したくせに泣くなんてしちゃダメだつて思つてるんだらうけど、お前は一個も悪くねえからな。悪いのは放火したやつだ。お前は悪くない。」

「デリックの言ひとおりシーは悪くないんだよ。だから泣いてもいいんだ。それにここには異世界だから誰も何も言わない。お前の家の人はない。思う存分泣きなさい。シーお前は悪くないんだよ。」

お前は悪くない。

ずっと誰かに言つてもらいたかった。

家人の人達は私について何も言わなかつた。けど態度に表れていた。跡継ぎを殺した妾の子つて。

みんな何も言わなかつたけど田線で、態度で私を責めていた。いつも正面から罵つてほしかつた。でも誰もなにもしなかつた。その田線がいやで家を出たんだ。

嘘でもよかつたから言つてほしかつたお前は悪くないって。

そうして泣かせてほしかった。

でも誰もそれをしてくれなかつたのに。

まったく違う世界で出会つた人達によつて私は泣くことを許された。

ああ、もつやつぱりこの2人は私を泣かせたいのね。

私は本日2度目の大泣きをした。

7ページ（後書き）

す、進まない。物語が進まないです・・・・・・
話を聞かない騎士達も一回出したいんですが；

「はー・・・こんなに泣いたの生まれてはじめてです。」

「ははは。まあいいだらう。ショウジョウこんなに泣いてちゃ身が持たないだる。」

そういう3人で笑いあつ。

今、2度目の大泣きをしてよつやく落ち着いたところだ。

もう体の水分がなさそうながら泣いたおかげで気分すつきり爽快だ。

「さて、それでシーアんたどうするんだい？結論出さないとまたあの騎士達が来ちまうよ。」

笑つてたアネシトさんが表情を引き締めて言つ。

「うん。そのことなんだけ泣きながら自分で考えてみたんだ。」

「・・・泣きながら考へてたのか・・・・・・。器用だな・・・
・・・」

アネシトさんが少し呆れながらつた。

むう。しうがないじゃないか時間無いんだし。と思つが平和的に

話を進めるためにここは私が大人になろう。

「お褒めいただきでどうもありがとうございます。」

語尾が強くなつたのは不可抗力だ。

「それでわたしやつぱり、王都に行こうと思ひます。どうせ断つても国王の勅命とかが来たら断れませんもんね・・・。それなら最初から行くつて表明して有利な立場で行こうかと思つて。まあ最後まで私は巫女姫じゃないつて否定はしますけど。」

本当は王都なんか行きたくない。ここアネット食堂で働いていたい。でももし王様が実力行使で私を呼ぼうとした時にアネットさん達に迷惑がかかるかもしれない。そんなのは嫌だ。

それなら最初から行くつて言つておいてある程度融通が利くようこしたほうがいい。どうやらあの話を聞かない騎士は私（巫女姫のことだけ）を崇拜している感じがあつたのである程度の我儘や命令なら聞きそうだし。

そう云ふたらデリックさんが

「お前つてかわいい顔してだいぶ腹黒いよな・・・。」

と少し引いた顔で言つた。

失礼な人だなー。でもまあ私は大人だから流してあげよつ。

「腹黒いんじゃなくて計画的といつてください。それに使えるものは使つたほうがいいんですよ。」

「はは。 わつにえれば私がシーにわう教えたんだつけか。」

そりこやアネットさんのおえた氣もある。

「あーそりこえれば教わった氣もしますね。えつと、それで王都に行くことなんですが今すぐには行きません。6・7日後に出発にしてもらいます。これぐらには譲渡してもらいます。つーかせます。」

「

「ああ、わうだね。そりしたほうがいい。それならちゃんと町の人にも挨拶できるしね。」

「騎士団にも挨拶に来てやつてくれ。ロウフとかが寂しがるからなー。」

「うん。わうするね。他にしたほうがいい事あつたつけ?」

「うーん荷造りはまだ荷物ないから2刻もあれば終わるしなー。」

「わうだねえ、店用に一ホンショクの作り方を教えてくれないかい?あとアドルフにも連絡するとい。シーに会えるとなつたらきっとあの子も喜ぶよ。」

「了解ですーそつか王都なんて良い事なわうだと思つてたけどアドルフ君がいるんだね。ちょっとだけ楽しみになつてきたよ。」

久しぶりに生アドルフ君に会えるのはちよつと嬉しい。まあそれを差し引いても王都行きは憂鬱だけじなー。」

「わうだな。あこつ元気にしてるか見てきてくれ。」

「じゃあとりあえず大体の方針は決まったからあとはまた明日とうか今日になつちやつたけど考えよつ。とりあえず今は寝て体を休めた方がいいよ。」

アネットさんに言われてもう次の口になつていたことに気がつく。うわー早寝な2人には悪いことをしてしまった・・・。

「うわつーもう旦またいでたんだね・・・。2人とも『めんなさい遅くまで。』

「いいんだよそんなの。って言つてもさすがにもう眠いな。じゃあまた後で話し合おう。俺明日休みだったから家にいれるし。」

「うそ。おやすみー色々ありがとつ。」

そう言つてとりあえずは寝ることにしました。

でもこんな不安定な状況で眠れないかもー！

なーんていう悩みはベッドに入つた瞬間に消えました。

私は2分くらいは睡魔と闘つたがあっけなく負け眠りに落ちた。神経図太いな私・・・・。

8ページ（後書き）

ちょっと明るくなりましたかね？

主人公は割とあっさりとした性格なので決断も早いです。
王都行きも結構あっさり決めちゃいました。

アネットさんとドミニークさんもそのことを分かつていて、王の勅命とか来たらダメなことも知っていたのでこちらも結構あっさりです。

でも3人とも本当はシーはアネット食堂で働いているのが一番だと
思っています。

習慣といつのはなかなか消えないらしい。

夜更かししたので朝起きれないかもと思つていたが眠気より毎朝6
刻に起きる習慣の勝利のようだ。
きつちり6刻に田^だが覚めた。

まあ田^だが覚めても眠いわーやっぱり。早寝早起きが一番だわーなど
と考えつつ下に降りる。

「あ、アネットさんおはよ^う。夜遅かったのに早いですねー・・・。

」

「おはよ^う。シーも早いじゃないか。ド^リークのアホは遅いけどね。
まつたく・・・」

やつぱりド^リークさんいないのか。彼はいつも遅刻ぎりぎりに起きて
騎士団本部に走つてしている。パンくわえながら行つた時は思
わずド^リークの少女マンガだ!つてつづこんでしまつた。

「あはは。まあ昨日は遅かつたですから・・・。朝食の準備手伝
いますねー。」

そういうながらキッチンに入る。

そうして2人で朝ごはんを作つていたらド^リークさんが下りてきた。

「ふあー・・・。おはよー・・・。2人とも早いなー・・・。

」

「おはよー」あくびしながら間延びした声でおはよーにわかれても全然おはよーな感じがしないもんだな・・・。

「おはよー」やこやかで「一トさん。」飯今でもおもしたんで食べましょー。」

3人で食卓につく。

「「「いただきまーす。」「」」

この世界には食事の時のおしゃべりいただきまーす や 「うれしうま」が無かった。私は言わないときがすまない性格だったので毎回言つていいたら意味を聞かれてそれ以来みんなで言つようになったのだ。

うん、いい習慣だ。

「あ、アリーネークさん騎士団やすませけやつたみたいですみません。
貴重なおやすみなのに・・・。」

「ん? あー大丈夫だ。騎士団長が特別に休みくれたからむしろ俺的にさうツキーだったからね。」

「へー休みくれるなんてすーになー。やっぱ王城の騎士達が来たからかね?」

「やうだつたんですか。なりよかつたです。それあの騎士達はいつ来るんでしたっけ?」

「おはよー」飯に招待したよ。食事しながらのほうがスムーズに進むか

「うね余話は。」

お匂かー・・・今7刻だからあと5時間。うむ。とつあえずアレし
とくかな。

「デリックさん。魔力の封印解いたいんですがお願ひしてもいいですか?」

「あー・・・そうだな。はずしどいたほつがいいかもな。よし!じゃあ飯食い終わつたらやるか!」

ところへとドモドモと二人は町のせすれにある小屋に来ていた。

「えじゅ わづ早速はじめるわ。」

デリックさんがさう言つてポケットから魔方陣の書いてある紙を取り出す。

その紙を地面に置いて何か呪文を唱える。

デリックさんの呪文は私は聞き取ることができない。なぜだか分からぬがこの世界の文字や言葉は完璧に分かるのに魔術の呪文だけはどうしても理解ができないのだ。
まあ私は呪文なし&動作なしでできるけどね。いやーチートですわ。

でも難しい魔術のときは動作をつけてしまつにそのイメージに合う言葉を日本語で言つてはいる。さつするとイメージしやすので魔

術を使いややすくなるのだ。

魔術は基本、想像の力だ。考えたことを具現化するために魔力を消費する。もちろん属性があつて得意不得意があつたりもするが基本はやっぱり想像だ。その点私は漫画とか映画とかゲームとかで想像がある程度できているので楽だつたりする。考える力《妄想力》もうごいしねつ！！

ちなみに属性は6種類あつて『風』、『地』、『水』、『炎』、『光』、『闇』である。

普通の人は基本2種類だが稀に3種類使える人が生まれるらしい。あと光と闇属性は貴重で使える人はほとんどいないとか・・・

あ、私は全属性ですよー。うん。チート万歳！

そんなことを考えていたらドミニクさんが呪文を唱え終わつた。彼の目の前には先ほどの紙に書かれていた魔方陣が宙に浮かんでいた。

「よしーシー急いで魔方陣の中入れ！」

私は急ぎ魔方陣の中に入る。

すると魔方陣が発光し始め私の体を包み込んだ。

次の瞬間からだの中に熱い何かが入り込むよつた感覚におちいる。

「一つ……！」

声にできない衝撃が私を襲うが歯を食いしばって何とか耐える。1分くらいだろうか、じつとして耐えていると魔方陣は急激に光を

失い消えていった。

私は思わず地面に座り込む。

するとヒーリークさんが心配そうにこちらを覗き込む。

「大丈夫か？ いきなり大量の魔力が入り込んだから体が驚いているんだろう。立てるか？」

そういうながら手を差し伸べてきた。

「んーなんとか大丈夫そうです……でもすごい衝撃ですねえ。びっくりしました。」

手をとり立ち上がる。

「ははっ。まあ普通の人じゃ今の量の魔力が体に流れ込んだら死ぬだろうな。でもシーはその魔力を普通に操れるんだからすごいよな。」

普通の人が許容量を越す魔力を体に入れると死んでしまう」ともあるらしい。

魔術は便利だけど危険でもあるのだ。

「まあ異世界人ですから。さて、もう戻りますかね。アネットさんとも作戦会議しなきゃだし！」

「作戦つて普通の言葉だが母さんとお前がいつとなんだか冷や汗が出るんだが……。」

まあなんて失礼な人だろ？ 作戦は作戦なのにー。

多少はせこい事もするけど基本は正々堂々となのにー。

せつこつたらでー!! クさんは遠くを見ながらツツ・・・と笑って歩き出した。

私は慌てて後を追つた。

9ページ（後書き）

この世界の人は基本魔力もちです。
多いか少ないかの問題ですね。ちなみにアネットさんは中の上くらいですかね？

アネットさんは少なめで下の上くらい。
シーはもうありえないくらいです・・・（笑）

12刻の10分前

私たち3人は食事の支度が整つたテーブルに座つていた。心なしかみんな緊張した面持ちである。まあ今から決戦ですからね。緊張しますよ私も。

ちょっと嘘ついたりもするかもだからポーカーフェイスが苦手な私はビクビクです。でもまあ嘘も方便つて言うから、うん。私はことわざに従つたまでだ！！という言い訳をここにしておこう。

そして12刻きつかり。食堂のドアが開いた。
あ、ちなみに今日は食堂は臨時休業です。申し訳ないことをしたな
あ・・・。

「昼食のお誘いありがとうございます。」

恭しく2人が私達に礼をする。うおー・・・この辺の優雅さがさすが王城で働いてるだけあるなって感じなんだよな。

「いえお気になさらず。さ、お掛けくださいな。」

アネットさんが騎士達に席を勧める。

2人はもう一度軽くお辞儀をしてから席に着いた。

さて、早速いきますかね。戦（戦じやないけど）は先手必勝！

「あの・・・昨夜は大変失礼しました。色々と衝撃的なことを聞いたため取り乱してしまって・・・。申し訳ありません。」
立ち上がって深くお辞儀をして謝る。

すると話を聞かない騎士のアレンさんが慌てながら言った。

「そんな、頭をおあげくださいーーいきなり押しかけて色々と話した私達に非があるので。巫女姫様は悪くありませんーー！」

フフ、やつぱりな。アレンさんは巫女姫崇拜者だったな。よし計画通りだせしめしめ・・・。

といつたような心の声は顔に出やす

「いえそんな・・・。私が悪いのです。でも許してくださいなんてお心が広いのですね。」

と微笑みながら言つてみると。

案の定アレンさんは頬を赤らめて嬉しそうにしていた。

「わあわあシー、その辺にして後は食事しながらにしなさい。せつかく作ったのに冷めてしまうよ。」

その一言でみんなが食事を始める。

「―――いただきます。―――」

3人で声を合わせて言つと騎士達が不思議そうな顔をしてこっちを見ている。あー説明したほうが多いかな?と思いつきりにいただきます の意味を言つと敬語が苦手な騎士、レイさんがしきりに感心していた。正直そんなにほめられると私が考えたわけでもないので若干後ろめたい。

でもこのおかげでレイさんも少しは私達に気を許したかな?だとしたら嬉しい誤算である。

料理の感想を言い合ひながらみんなで食事をする。その間騎士達は巫女姫について何も言つてこなかつた。昨日のこともあつて遠慮してるのだろうか？まあちょうどいいや。

みんなのお皿がほとんど空になつた頃に私は切り出した。

「えつと、それで昨日私のせいで途中になつてしまつた話ですが…」

そうこうと騎士2人が食事の手を止めこちらをじっと見る。見られたことで私のチキンハートがドクドクいはじめた。震えそうになる声を抑えてハツキリと言ひ。ここから本当の勝負だから始めてこける訳にはいかない。大丈夫！私は女優よ…！

「私王都に、城に行きます。」

「巫女姫様、本当ですか！？ ありがとうございますー！」

アレンさんが即座に反応する。反射神経パネエ…と思いつつ返事をする。

「ええ。ですが、条件があります。こいつを守つていただかないと私は行けません。」

条件といつ言葉に静かに聞いていたレイさんがピクリと反応する。

「条件とは…？」

「1つは、レジスターJUNIORの周りを覆つている古の森の開発をやめる事です。この森は多大な魔力を持つた木々が育つている。なのに開発で木を切つていてるでしょう？ そのせいで魔力が漏れてしまつて町

の人々は体調を壊してしまっています。それに森を開発しては魔物が町に来てしまいやつぱり危なくなるのです。なので中止してもらいたい。」

このフェーンの町は東側が森で覆われている。その森の開発が半年前から始まつたのだ。そのおかげで魔物は来るわ、魔力は漏れるわで一時大変な騒ぎになつたのだ。まあ今は私が森に接している東側を結界で覆つているから魔力は流れてこないんだけどね。でも私がいなくなつたらさすがに遠くて結界の威力が弱まると思われる。なのでやめてもうしかないかなーっていうね。実際開発してくれても町の人たちは嬉しくないし。

「2つ目は地方の騎士団にもつと支援をしてください。これはフェーンのみじやなくて他の町もです。地方の騎士団はかなり苦労してるんです。最近はよく魔物が出るから・・・。

最後に城に行く出発は10日後にしてください。私にも準備などがあるのです。

この3つを守つてくださいなら私は王都に行きましょう。」

そういうと2人の騎士は考え出した。うんまあ結構無理難題言つてるつて自覚はあるから急かさないよ。だつてねえ・・・一介の騎士達に決められるような問題じやないからねー。

ま、分かっても条件出すけどねー。

腹黒いんじやないですよ?ただこの位してもらわないとね、行きたくない王都に行くんだから。

「・・・・・・前の2つの条件は飲みましょう。ですが10日というのはちょっと・・・。急がねばならないので

おや、そっちがダメなのね・・・。開発中止と地方騎士団支援が

駄目かと思つてたけど。

そんなに急いで私を連れて行きたいのか……。でもまあこいつちも譲らないけどね。

「申し訳ありませんが10日は譲れません。いきなり行けるようなものではないです。仕事だってありますし……。」

食堂はどうにかなつても魔法の便利屋のほうはやりかけの仕事を終えてやめるむねを町中に知らせなきゃならない。

「…………」

「…………」

無言で圧力の掛け合いが始まる。

ハツキリ言つちゃえばめちゃくちゃ怖いがここで怯むわけにはいかないので私も無言で応戦。

「…………王からはもし、来ないといつづなら実力行使でもかまわないといわれています。それでも、ですか？」

1分くらいの沈黙の後にレイさんが声を絞り出した。

え？ そんな物騒な感じなわけ？ 王様よ……。

まあでもこいつちとしてはこの展開は大歓迎だ。アレをやれるからねー。

題して『実力差を見せ付けちゃうよー』こいつのほうが格上なんだよ

大作戦！！！

うん。ネーミングセンスについては触れない方向で。

「ふふ、それは誰に向かっていってるんですか？もしかして私は
か？」

そういうて私は笑う。相手が凍りつくな、「冷たく、嘲るよ」と、
笑う。

笑うのと同時進行で、魔力を大量に放出する。封印解いてリミッタ
ーは無いのでどんだけ出しても痛くもかゆくも無いです。まあ封印
してもこのくらいは出せたけど。ちなみにアネットさん達には始
めから結界張っています。なので苦しむのは彼らだけ。

騎士2人はなかなか魔力が多くなようで始めは気づいてないようだ
ったが私がちょっと放出量を増やすとすぐに体に変化が現れたよう
だ。

アレンさんは頭を、レイさんは胸を押さえて苦しげる。

「つな、にをした！？」

レイさんが叫ぶので私は笑みをキープしたまま答える。

「ただ魔力を放出しているだけです。でもまあ私の魔力は純度が濃
いらしいしちょっときついかもしませんね？・・・さて、これで
実力差を分かつていただけましたかねえ？」

わざと間延びした口調で言う。「これだけでイライラって増すよね！
2人は「クッ！」とかなんとか言って黙り込んだ。さすが王城に仕
えている騎士だわ～。勝てないと思った相手には逆らわないところ
がすごいわね」。この辺の騎士だったら普通に襲いかかってきそう
だもの。

「分かつていただけたようではよかったです。ん～・・・では貴方達
の熱意に免じて少し譲歩して7日後に出発にしましょう。今日から
7日後の朝に迎えに来てください。」

そいつって私は彼らに転移の魔法をかける。もちろん彼らの荷物にもね。

アレンさんとレイさんは自分の体がわずかに発光しているのに驚きを隠せないでいる。まあいきなり自分の体が光つたら誰でもびっくりするわ。

「転移の魔法です。書はありませんし、絶対に安全に飛ばすので安心してくださいね？ 飛ばすのは古の森の入り口にしちゃいます。実際に開発の現場見たほうが多いかもですもんね。ではさよーならあ～」

笑顔で言い終えると同時に飛ばす。

彼らがいなくなり（飛ばしたともこいつ）私は終わったぜ・・・と安堵のため息をつく。

そしてアネットさん達に

「無事終わりましたね！！」

といいながら笑顔で振り返つたらデリーラークさんに引きついた顔で

「お前・・・・怖すぎるわッ！――！」

と突っ込みました。がんばったのに――――――

10ページ（後書き）

シーは実は腹黒くて計算高いです。でもビビリw
ポーカーフェイス苦手とか言つてるけど実際はかなり笑顔が怖かつ
たみたいです（ドミニク談）

「じゃあ行つてきますねー。」

笑顔で皆の方を見て。すると、こいつらは笑つてゐるに町のみんな（主に騎士団の人たち）が泣き出した。泣きたいのはこいつらじゃよー。

「シャイシャイシャイ、本当に行つたの?」

ロウフが涙目で。女の子じゃなくて町を守る騎士団が泣いちゃつてこいの・・・と考えていたが話しかけられて意識を戻す。

「うそ。嘘と離れるのは寂しいけど行かなきゃだから。」

だから泣かないで、とこいつは元に嘘泣き出しました。え、なんか私が泣かしたみたいな感じになつたやつてるよ・・・。とゆーか騎士団の泣きつぶりに感動してゐるよ・・・。

「やつて泣かないで下さこよー。それにわたし転移の魔法で簡単にこいつを来れますから。」

そういうと町民みんなの動きが止くこと止まる。（アネットさんとアーリークさんは動いてるけど）

「え? シーツ帰つてこれるの? もつこの町には二度と戻つて来れないとかじゃないの?」

「え? そんな話になつてゐるの? 普通に帰つてくるけど? 転移の魔法

なら一瞬でこれるけど……。」「

そうじつたら皆が口々に「あの噂は嘘だつたのか!」といいながらロウフをしづきはじめた。

噂? 聞き捨てならない言葉が聞こえたような……。

「ローウフーん、噂つて何のことかなあ?」

しばかれているロウフに笑顔で聞いかける。なんでもドリードークさんいわく怒っているお前の笑顔は普通に怒られるのより100倍怖いらしい。失礼だわーと思っていたがこのロウフの怯えようからいつて事実っぽい。悲しいかな……。

「い、いやね、なんか王城から騎士が来てたし、その騎士たちが跪いてたからさシーは実はめちゃくちゃ偉い貴族なんだけど貴族の暮らしが嫌になつてこの国のはずれの町に逃げてきたんだけどとうとう居場所がばれて連れ戻される、とかそんな感じかなーつて仲間と話してたんだよ。そしたらその話がどこから漏れてさ、いや別に大声で話したわけでは無いんだぜ? でもほら場所がバーだつたらさ聞こえちゃつたみたいでさ。止めようとしてもすでに時遅くてさ。否定しても真実みたいになるかとおも、グハア!」

長いので一発殴つて沈めときました。長かつたからだよ? 決してうざかつたからじゃないよ? その一発に今までの恨み込めたとか決してないからね?

「みんな、その話であつてんの王都に行くことだけだから。普通に戻つてくるから。もう・・・ロウフめ。余計なことしゃがつて。またにかく一生の別れではないからね。・・・・・さてーそろそろ行くね。騎士さん達も待ちくたびれてるし。」

この会話の中アレンさんとレイさんは微動だにせずに立っていました。偉いっ！さすが一番隊の騎士！！姿勢も無駄にいいよー！

「ああ、いつてらつしゃい。氣をつかるんだよ。」

「おうこつて来い。いつでも戻つてこいや。」

アネットさんとドミニクさんが笑顔で送り出してくれる。それだけでだいぶ気持ちが軽くなつた。

「うん！ いつてきます！！」

もちろんわたしも最高の笑顔で答えて騎士達のほうへ行く。

「お待たせしました。では行きましょつか！」

そういう2人は町の方に一度お辞儀をして黙つてわたしの前を歩く。

わたしあるの後ろを黙つて歩く。皆が口々に何か言つてゐるけど後ろは振り返りませんよ。未練ダラダラなのにさらにここにいたくなつちやうから。涙ぐんできた目を押さえて黙々と進む。

黙つて5分ほど歩いたところに馬車がありました。さらに騎士と思われる人影が7人ほど。

え？な、何で人？まさかこの7人の人たちつてずっとここで待機してたわけ？7日間も、この寒空の下にテントを張つて？雨の日もあつたのに？

さつきまであつた感傷的な雰囲気が一気に吹き飛びました。変わりに冷や汗がこんにちはだよ！

「あ、あのもしかして彼らはずつとここで待機してたんですか？」
恐る恐る聞いてみた。否定し乍、否定しようと頭で念じながら。

「はい。そうですよ。ちなみに彼らも一番隊の隊員です。」「アレンさんが平然と答えてくれました。

うおーやっぱりここで待機か！しかもその寒そうなテンントですか。
悪いことしちゃったよー。

うーむ、ここはやっぱり日本人らしく

「すみません…」

謝りました。大声で。そしたら騎士×9がこっちを一斉に見た。あ
らまあ息の合った動き。

そしてレイさんが不思議そうに口を開く。

「え？ なぜ謝つておられるのですか？ なにがありましたか？」

「いえ、そのままからレイさんとアレンさん以外に騎士の方がいらっしゃると思つてなくて。2人なら町の宿に普通に泊まれるだろうと思つてたので7日とか言つたんですけど・・・。本当すみません！ テントで7日つて大変だつたですよね・・・。雨の日もあつたし。もうほんとすみません。」

一気に喋り終えて下げていた頭を上げるとみんな鳩が豆鉄砲を食らつたような顔してました。こんな顔始めて見たわー。実際にできるのね人間つて。というか、何にびっくりしてるのこの人たち。

「え？ つまり巫女姫様はあの者達が7日間もテントで過ごしてい
たのが申し訳なく思つている、と言つことですか？」

通常の顔に戻つたアレンさんが聞いてきました。え、もちろんそ

だけど。むしろそれ以外に解釈の方法あんの今の言葉、と思いつな
ずくとアレンさんが倒れこみました。

「な、なんと慈悲深いお言葉・・・。巫女姫様なんてお優しい
のでしょ？『ご安心ください！』の一番隊にいるものたちは皆頑丈
さがとりえなので問題ありません！巫女姫様がお心を痛める必要な
どど！」（モジヤコ）
「ません。」

倒れたんじゃなく心酔してたみたいです。紛らわしいわッアホ！心
配しちゃつただろうが！

てか散々な言われようだけいいのか一番隊の隊員よ、と思いつ周囲
を見れば皆アレンさんみたいになつてました。（レイさんともう1
人の隊員さんは除く）えー・・・何この人たち。

こんなんで大丈夫なのか？王都に向かつ旅は・・・・・・・・・・・・
・・・。

一気に不安感が増してきました。

11ページ（後書き）

やく出発です。ここまで来るの長かったです。早く城行きたいですわー。

12ページ（前書き）

進みません物語が……。それもこれも騎士達のせいだ！（）

ガツタンゴットン ガツタンゴットン

規則正しい音を立てながら馬車が進む。わたしは馬車に乗るのははじめてだったので始めはウキウキしてたけど嫌気がさしてましたよ。お尻痛い。めっちゃ痛い。誰かクッショーンをくれ！今なら1万円でも買つ！！

「大丈夫ですか巫女姫様？先ほどから落ち着かないようですが。」アレンさん、鋭いよ。見なかつたことにしてよねー。お尻が痛いんですとか言いにくいわ！

「いえ、馬車にはじめて乗つたものですから落ち着かなくて・・・。

「初めて？今までは何で移動していたんですか？」

ルーカスと名乗った騎士が話しかけてきた。彼はあの馬車の場所で待機していた騎士の一人で馬車に乗る権利を勝ち取った幸運な人らしい。なのでさつきからずつと二二二二口している。

「移動ですか？私はほとんど転移魔法です。楽なので。」

「あー転移の魔法ですかー。そりや馬車なんて必要ないんですよね。ん？じゃあ王都まで転移はできないんですか？」

「転移の魔法は一回行つたところじゃなきや行けないんですよね。なので王都はダメです。だいたい初めての場所は馬でそこまで一回行って帰りは転移で帰つてくるつて感じですね。」

へえ～と興味深そうに聞いてくれている。ルーカスさんはアレンさんみたいに崇拜しているわけでもないし他の騎士さん達みたいに畏

まりすきてないから話しやすい。そして彼、聞き上手なのだ。思わずいつぱい話したくなってしまった。馬車の中では彼と時々アレンさんを交えてずっとお話ししました。

馬車に乗つてからもう8時間は経つただろうか。だいぶ外の景色も変わってきた。さつきまでは森っぽかったけど今は草原つて感じ。開放感あつていいわー。ちょうど夕日も沈んできてもうとつても綺麗だ。あー写真撮りたいな。カメラ欲しい。

でもだいぶ暗くなつてきたから今日は野宿かしら？と思つていたら馬車が止まつた。うむ、やつぱり車と違つて止まるのにも衝撃半端ないね。頭を打ち付けそつだつたよ！
止まつてからしばらくすると扉が開いてレイさんがこひらを向つように見た。

「誠に申し訳ありませんが本日はこひらで野宿でよろしくでしちょうか？」

いいもなにも私はキャンプとか結構好きなので大歓迎である。宿も素敵だけど野宿も結構いいものだ。

「もちろん大丈夫です！むしろ好きです！」うつ感じ。

とこつとレイさんはお礼を言つて手を差し伸べてきた。

ええ、そうです。トリップ小説の王道の馬車から降りるときのエスコートです。ぶつちやけ、いらねえええ！けどやるしかねええええええ！…つて感じになりますよこれ。

渋々（と思つているが顔には出さない）手を取つて外に出た。

「ん――――――！」

降りて思わず声を上げながら伸びをするとルーカスさんに笑われました。

「やうとう乗りなれないんですね。」

「あはは・・・。お恥ずかしい限りで。」

そういうて談笑する。むう・・・ルーカスさんつて私より年上なのに私に敬語なんだよなー。やっぱり巫女姫だからかね？でもできれば皆と普通に話したいから敬語とかやめて欲しいのう。夕食の時話してみようかな。

そんなことを考えつつ周りを見渡すと4人ほどの騎士がテントらしきものを張つてました。

「あつーちゅうと待つてくださいーーー！」

慌てて止めに入る。すると騎士達が不思議そうな顔をしていました。

「何がありましたか？」

「いえあのもしテント張るなら私が結界を作ろうかと思つてしまして。結界の中なら魔物来ませんし気温調整もできるので寒くないです。張つてもいいですかね？つか張らせてください。」

結界は便利なのよー！張るときには色々設定すれば温度調整可能だからね。快適快適。なので若干強引に言つてみた。

4人の騎士は困つてた様子だったのでレイさんに聞いてみた。彼は少し悩んだ後に私が大丈夫ならお願ひしたいと言つてきたので早速張ることにしました。

まあ張るつていつてもイメージして少し呪文唱えればいいだけだけ。結界は詠唱つきのほうがイメージしやすいので声に出してやつ

ている。

「範囲、私を中心には半径20メートル、対象は私を含む今この場にいる人間10人、効果は魔物から見えなくなる、対象以外は入れなくする、内部温度を24度に保ち続ける、対象以外の人物が結界から10メートル以内に近づいて来たら私に知らせるの4つ。形は半球体。地面も覆う。」

ブツブツ呟いて指で半球を描く。すると私たちの周りに白っぽい半透明な膜が出来上がる。

「うしつ！ できたー。」

そう呟いていたら騎士達はかなり驚いたみたいで膜を無言で見つめていた。

「この結界は対象者なら触つても大丈夫ですよ。有害じゃないです。ちなみに触るとふにゅふにゅしますよー。」

そういうたらルーカスさんが恐る恐る触れてみていた。

「おおっ！ 本当にふにゅふにゅする！ やべえ気持ちいい。」

そういうて連打し始めた。周りの騎士達も彼に触発されてか触つていた。歓声を上げながら。

結界で小学生並にはしゃぐ騎士つて……。

この国の未来が少し不安になつた。

12ページ（後書き）

今更ですが　は日本語つて意味です。
結界は本当は張るのにめちゃくちゃ力を使います。それを他の魔法も
併用しつつ維持するのは神業です。

結界を張った後はすぐにご飯になつた。しかしの世界の人は寝るのが早い。なのでご飯も必然的に早いのだ。

ちなみに今日の夕食は干し肉みたいなのとちょっと固そうなパン、スープと果物っていう豪華なのが質素なのが分からぬ夕食でした。（果物は結構高価なのです）

「巫女姫様このよつた粗末なもので申し訳ありません。」

アレンさんは謝つてきたけど結構おいしそうだし旅先で豪華なもの食べようとか思つてないんで別にOKだ。つーかお腹空いてるから今なら何でもおいしく食べれそう。長つたるい謝罪はいいから早く食わせてくれー。

「いただきます。」

待ちに待つた食事スタート。早速パンをかじつてみました。・・・・・うん！硬い！え、フランスパンなんか敵じゃないぜつてくらいに硬いんだが・・・・・。釘が打てそうだぞ釘が。うーむこういうものなのか？

「巫女姫様、それはこいつやつてスープにつけて食べるんですよ。」ルーカスさんが教えてくれました。なるほど。確かに柔らかくなつておいしくなつた。
つてルーカスさんで思い出したけど姫さんに敬語やめてもらつよう言おうと思つてたんだ。忘れてたわー。

「あの姫さん、お願ひがあるんですけどー・・・つて食べたままで

いいですよーそのまま聞いてください。」

私が話し始めたら皆わん食事の手を止めよつとしていた。どんだけ
…………。

「それでお願いなんですけどね、私に敬語ではなすのやめでもらえ
ません？私は年下だしそんな敬語で話されると困りますからうんですよ。
あと巫女姫じゃなくシーツ呼んで下さい。」

ぶっちゃけ私、巫女姫だと思わないしね。私は海野翔子だもん。そ
んな凄い人じやない。なので敬語で話されてもかしこまつちゃうだ
けだ。それに名前で呼んでほしいっす。

「そんな！巫女姫様とのような口調など……。」

「そんなこと言わずにー全然気にしませんしーむしろその方が嬉
しいですし」

「いらっしゃる巫女姫様の頼みでも無理でござります。親しげにお話しす
るなど……。」

「いやだからさあ……。ああもう一ルーカスさんヒレイさん！
ー。」

こうなつたら敬語が苦手そうな2人に丞先向けてやるー
いきなり名前を呼ばれて2人はビクッとしていた。

「貴方達2人は敬語苦手でしょ？ならもう遠慮なく普通の口調で
いいからー！そうして欲しいから。お願ひしますーー！」

そういうて軽く頭を下げる。ちらりと田で様子を見てみたら2人と

もじょと困惑した顔をしていた。

沈黙が場に落ちる。き、氣まずい・・・。ああ、せつかくのスープが冷めてしまつよ。早く答えてくれ。

「お顔を・・・いや顔を上げてくれ。シー様。」

レイさんが声を発した。

「つ、レイさん！ ありがとうござります！ つてウギヤアアーーー！」
感激のあまり勢いよく顔を上げたらその反動で後ろに倒れてしまった。ガゴン！ といい音がなつて私の後頭部は地面とこんにちはしてしまつた。

「い、痛い！！ やばいタンコブできそり・・・。
涙目になつていたらクツクツと笑い声が聞こえた。

「クク、シー様面白すぎる。普通そんな勢いで顔上げないだろ。」

笑っていたのはルーカスでした。うん敬語じゃなくていいって言ったけどこんな笑わなくともいいじゃないか！ 恥ずかしいわ！！

「ちょっと！ ルーカスさん笑いすぎです！！ 本当痛かったんだから。
もう少しつづいてもありがとうございました。」

そういつて微笑んでいたら

「レイ！ ルーカス！ 貴様らのよくな態度でいいと思つているのか！！！」
と怒声が・・・・・・。

アレンさん、私がお願ひしてるからね。むしろそれが嬉しいのになー。

どうやら彼は話が通じない人らしい。それに他の騎士達も1人を除いてアレンさん派らしい。非難するような目線を彼らに向いている。ありやりや・・・。これはまた予想外にめんどくさい旅になりそうだな。

「アレンさん、私がお願いしたんです。彼らに悪いところなんてどこもありません。皆さんも今すぐは無理かもですけどいつでも敬語やめていいです。で、スープが冷めちゃうんで食事再開しましょう！」

そういうて干し肉に噛り付いた。うん結構美味である。噛めば噛むほど味が出るって感じ。

アレンさんは不満そうだったけど食事を再開していた。

私はスープを飲みながら考える。

今までこの中では誰を信用するかが決まった。
もちろんレイさんとルーカスさんともう一人、レイさんの部下っぽい人だ。この彼はさつきからずつと何も発していない。でも多分信用できると思う。レイさんの部下だしね。私を信仰してる感じもなーいし。

他の騎士達はアレンさんの部下っぽい。彼らはいい人だと思つけど信用はしない。だって私個人を見ていないから。

彼らは一回も私を名前で呼んでないし目を見て話してもくれていなーい。“巫女姫”にしか興味がないみたいだ。そんな人を信用するほど私は素直じゃない。

9人中3人が・・・少ないけどまあ良いほうだろ。味方が誰もいないよりは。

とりあえずは信用していないほうのアレンさん達から情報を集めよう。きっと彼らはペラペラ喋ってくれるだろう。でもってその後にレイさん達から聞いて2つを照らし合わせて真実を探すとしますかね。

そこまで考えて私はぐいっとスープを飲み干した。

13ページ（後書き）

シーはスープを飲み干しちゃった後に気づきます。重大な事実に・。
・。

「まだパン残つてたあああ！！」

その後、結局笑っているルーカスにスープ分けでもらつて食べ终えます。

「ククク、さつき教えたばっかりなのに・・・なんで飲み干すんだよ。やべえ面白い。」

シーは彼のツボみたいですね。多分これから先「ことある」と笑われます。

シー、ドンマイ！強く生きるつー

「王都についてですか？」

「ええ。王都について教えてほしいのだけど黙日かしり?..」

清々しい朝日を浴びていい馬車の中で私は首をかしげて聞く。昨日決意したように早速情報を集めてみようと思います。まあ最初は今から行くところの情報を仕入れることにした。

ちなみに今聞いているのは今日の馬車の担当の一コラスさんです。
彼はアレンさん派の人。

昨日寝る前に考えたんだがアレンさん派の人たちは私に夢を抱いているみたいだつたので私はいつそ猫をかぶつてみることにした。巫女姫信仰派の人の前では素の私は出さずに巫女姫を演じるのだ。実際私は演技とか苦手だからあんまりやりたくないが事を円滑に運ぶため我慢します・・・ああ・・・ポーカーフェイス難しいよ。ちなみに演じるのは『ちょっと天然だけど聰明な控えめのかわいらしい女性』の予定だ。口調も変えてみているが難しいわー。

「もちろん大丈夫でござります。私にお教えできることならばなんでもお教えいたします。」

「コラスさんが爽やかな笑顔で言ってくれる。い、イケメンめ！その笑顔は破壊力が・・・・。本当何故だか知らないがこの国は美形が多い。まったく日本人が生きにくい世界だ。」

「ありがとうございます。とても助かりますわ。でも私世間知らずなものでほとんど何も知らないの。いろいろ聞いて困らせてしまうかもだけど……。」

そういうて俯いてみると、するとやつぱり「ハラスなんか一心配なさらないで下さい」とか言ってくれてます。

私は俯いたまま

「ウツヘツヘ演技完璧だセ！意外と楽ししかモ」
なんて考えてほくそ笑む。

「でなんか私悪女っぽい……？」一応罪悪感はあるんだよ？でもやつぱり彼らにはこれが一番だと思うのだ。

なーんて考えていたら、一ノラスさんのお話が始まった。

「ここ、大陸一の大國フェルバンティエの王都の名はオルインピアダといいます。オルインピアダは王都なだけあって人口も多いですが町の景観もとても美しく別名、精霊の都とも呼ばれています。あちなみに精霊は実際は存在してはいないのですが御伽噺の中に出できます。その中の精霊は本当に美しく、美しい花々ですら精霊の周りではくすんで見えてしまうとか・・・。そのような美しい精霊が住んでいそなくらい美しいといふことでその名づけられたらしいです。その王都の景観ですが建物は・・・・・」

その後も続く「ニコラスさんのなつが―――――お話に適当な相槌を打ちつつ必要なところだけまとめるところなつた。

王都の名前はオリンピアダといいこの国一番の面積を誇っている。（よつて大陸一でかい都市）また建物もフェーンなんかよりは進んでいて魔法で動かすエレベーターとか付いてたりするみたい。魔法もだいぶ馴染んでいて魔法学校とかあるらしい。・・・ひげの長い先生とかまるメガネの額に傷のある少年とかを一瞬想像してもしようがないよね？

さらに王都の真ん中には大きなお城。そこが私たちの旅の終着点である。ニコラスさんはやたらとこの城のすごさについて語っていた。勢い半端なかつたよ。乗り出してきていたよ。（私とニコラスさん向かい合わせで座つてます）なんでも城の周りは結界が張つてあり城内で許可の無いものは簡単には魔法を使えなくなるみたい。

まあ私は結界書き換えられるから問題ないけどねー。チートですけど何か？

こんなもんしか聞き出せなかつたがまあとりあえず必要最低限の情報は手に入れた。本当は城の警備状況とかについても聞いたかつたけど『ちよつと天然だけど聰明な控えめのかわいらしい女性』がそんなこと聞かなそうだもんね。しかたない、この辺はもうちよつと親しくなつてからルーカスに聞こう。

とりあえずほんの少しだけど情報集まつたぞー！

1~5ページ（前書き）

更新滞つてすみません。。。色々立て込んでまして；
できるだけ更新できるようがんばります！-.

フーンを出発して早4日。見える景色もだいぶ変わってきた。

とかなんとか言つてみたいが実際景色は草原のまま全然変わらない。ずっと草原。どこまでも草原。遠く見ても草原。エンジレスに草原。草原しか見えない。

いい加減に目が縁を見ることを拒否し始めてるんだが・・・

4日も経ったのに今だ次の町にも着かない。どんだけ辺鄙な所にあつたんだフーンよ・・・。揺れまくる馬車に慣れ始めちゃつたぞ。いつたいあと何日でつくんだろ？

疑問に思つたら即質問！今日の馬車担当のルーカスさんに聞いてみる。

「ルーカスさんあと何日ぐらいで王都着くんですか？」

「おー、確かあと4日もすれば着くはずだ。今日は野宿だが明日からは町の宿に泊まれると思うぞー。」

宿！なんて素敵な響きつ！！！野宿も好きだけじどうせならベッドで寝たい今日この頃です。枕欲しいよ枕。ところで次の町つてどんな町なんだろ？フーン以外の町は初めてだな。

「その町つてどんなところなんですか？」

そういうとルーカスさんは苦笑しながら話した。

「あんまり治安がよくないかな。だからシーちゃんは皆から離れんなよ。」

ルーカスさんは2人のところでは名前もちゃんと付けで呼んでくれるようになつた。嬉しい進歩である。まあ人前ではもう少し固めの敬語＆様付けなんだけどね。

「そ、うなんですかー・・・。まあベッドに寝れればなんでもいいですわ。」

実際1日寝るだけだからねー。別に治安が悪くてもそんなに関係ないはず。

私がそういうとルーカスさんはまたツボにでも入つたのか笑い始めた。

この人は私の行動が基本的にツボらしい。前にかつたーいパンが残つてゐるのに一緒に食べる用のスープを飲み干しちゃつた時とかひどかつた。「笑うなー馬鹿者ーー」とキレるアレンさんの味方をしたくなるほどだつた。まあアレンさんのフオローローも身に刺さつたけどね！

とにかく困つた人だが今のところ最も信頼している人でもある。一緒にいて楽だし情報も的確なものをくれる。が、全ては話さないあたりがね・・・絶対こいつ腹黒いと思つ。

「ルーカスさんいい加減笑うのやめてくれません?それで話思いつきり変えますけど今日も国の仕組みについて教えてください。」

「はいはい。まったくシーちゃんは勉強熱心ですねー。それで前回は国は神殿と王宮の2つに大きな権力があるって所までだつかけか?」

「はい。その2つが競い合つてゐて聞きました。」

ルーカスさんの話によると王宮と神殿はどちらが上に立つか日夜争つてゐるらしい。今のところ神殿が一步リードしてゐみたいだがな

んでリードしてるかはルーカスさんにはぐらかされた。この人引くタイミングがうまいんだよなー。困っちゃうぜ。

「そうやつ。争ってるんだよねー。それでねその争いのキー・ポイントが、まさかのシーちゃんなんだよねー。」

「へー、そんなんですか。私なんですねー……って私!? ジジ」と

意図が分からぬ
イントって何？

しきたりなくて利の名前が出てくるの、キーボ

「ククッ、ノリシッゴミひて……。ちょっと睨まないで！ちゃん
と話すから。まあシーちゃんって言うよりは巫女姫ってことかな。
巫女姫は他の騎士が話していくようにこの世界で絶対の力なんだ。
だから巫女姫を手に入れたほうが上になれると思ってるのだろう。
今回シーちゃんを半ば無理やり連れてきたのも王様の命令なんだよ
ねー。焦っているんだよまったく……。」

そういうてルー・カスは大きく溜息をついた。

ふーんなるほどね。私が王都に行かなきやいけない原因は「れか・・・・・。ふーん。」こんな理由で、アネットさん達と引き離されたのかー。

「ふつざけんなああああああああああああ！」

思わず叫びました。

「何この理由しようもないわ！王宮だろうが神殿だろうが知るかよつ
！！！つーかこの人たちさ巫女姫の話知らないわけ？こんな権力争
い見て巫女姫喜ばねーだろーがああああああああああああああああ
しいんじやねーのかボケエ！」

信じらんない！&許せん！！

「・・・決めたわ。ええ、もう決めました。」

私はそう呟く。

そうすると私の叫びにびっくりしていたルー・カスが聞いてくる。

「何を？」

「王宮の言いなりにも神殿の思つようにも動かないわ。こんなくだらない理由で私を呼んだ事を後悔させてやるんだから！――！」

そういうった時の私の顔は本当に怖かったらしい（ルー・カス談）

15ページ（後書き）

お気に入り登録件数が100件超えました！
ありがとうございます（・・）本当に嬉しいです
毎日とはこきませんができるだけ更新していきたいと思っています

見張りの騎士以外がみんな寝入った頃、私は寝袋もどきから体を這い出した。

今田は野宿最後の日になるらしいのでいつもよりいつぱいアレ》・『をやつておこうと思ったのだ。宿に入ったらできなくなるからね。そんなことを考えつつ私は見張りの騎士達に意識が飛ぶ魔法をかける。意識が飛ぶつてもそんな危ないもんじやないですよ？ちよつと氣絶するようなもんです。ちよつと記憶が飛ぶようなもんです。

騎士達がしつかりと意識をなくしたのを確かめてから結界の外に出る。

「寒っ！」

外の気温は王都に近づくにつれて低くなつていつてるみたいだ。寒がりな私には迷惑な話だ。寒い気温に耐えられないでの自分の周りに薄く結界を張る。すると一瞬で暖かくなつた。

あー魔法って便利だわー。上着いらすだわー。

装備が完璧になつたところで私は少し結界から離れて辺りを見回す。5分くらいこきょろきょろしていたらようやく見つけた。うんまあとりあえずはあいつらだな。

おびき寄せるために軽く光を出す。すると気が付いた魔物が結構な勢いで一ひりに走ってきた。

そう私が探していたのは魔物である。

私は野宿生活が始まってから（まだ4日しか経つてなけど）魔物狩

りを夜な夜なやっているのだ。

魔物の毛皮や牙などはお金になる。私はあんまりお金を持つていないので稼げるところで稼いでおきたかった。いつ何が起こるかわからないしね。金は持つていて損は無いだろ？って言つ考えだ。

ドタドタとうるさい足音を立てながら魔物が目の前までやってきた。今回の奴は牛と豚と蛙を合体させたような奇妙な奴だった。数は3体。

魔物にはドラ エみたいに名前が付いていたりしない。『魔物』と「一匹切りで分けられているだけだ。」として分けるとすれば「実体のある魔物」と「実体のない魔物」という位だろう。

ちなみに実体がない魔物というのは幽霊みたいな感じだ。攻撃しても当たらないのだ。倒すにはどこかにある核を壊すしかない。こいつは剥ぎ取る素材が無いので私はあんまり好きじゃない。

いやー今回の奴実体あつてよかつたよかつた。
んじやちやつちやと終わらせましょうー！

私は魔力でロープを作るようなイメージをする。すると空中にピンク色の細いロープが出来上がる。

これはシーお手製！魔力ロープ！…ピンクなのは気分です。意味は無いです。

そのロープを使って魔物を縛り上げる。ここでポイントなのは一気に縛り上げることだ。ゆっくりやつていると毛皮とかに傷がつく恐れも出てくるからね。一気にギュウッと締め上げる。するとはじめは暴れていた牛豚蛙（シーめ命名）3匹は動かなくなつた。

はい、これで終了です。

そうです。地味ですよ、ええ。素材を傷つけないためには地味なこの方法がいいんです！炎とかやつちやつと焦げるからね普通に！地味でいいんですよ。

魔力をこめるのをやめてロープを消す。そして今度は腰に刺してあるナイフを取り出して皮などを剥ぎ取る。

最初の頃はグロくてできなかつたけど1年いたら慣れました。じゃんじゃん剥いでいきますよ。今なら普通にかわいいウサギちゃんも殺れるきがする。

「ふふ～ん　ふんふんふ～ん」

鼻歌なんて歌いながらどんどん剥いでいきます。下が血の海でも動じない精神が培われてます。あんま嬉しくない！

あ、ちなみに魔物でもたいていは血の色は赤です。たまに緑やら紫もこるけどね！そいつらは食べません。でも血が赤なら普通に食えます。マジで。おいしいですよ？

まあこの世界では食べる人少ないみたいだけどねー。当たり前か・・・。魔物だもんね。食わないよね普通。今のところ魔物を食べる人って1人しかあつたことないもんなー・・・。

今日は血が赤いんでお夜食にしますよ。昨日のは紫でした。紫は毒があるんだよね。さすがに食べずに燃やしました。証拠隠滅

火の魔法で軽くあぶつたあとにさつき調味料を勝手に頂戴しといたのでそれをかけて食べる。シンプルな調理法だがこれ位しか出来ないんだよね。ああ凝つた料理食べたいな。

むむ、意外においしい！見た目はかなりグロいけどこいつおいしい

な。予想外のおいしさに下の血の海を片付けるのも忘れて頬張る。
うまつうまつ！と夢中で食べていたために私は全然気がつかなかつ
た。背後の人いることに。

何かの気配を感じて肉を頬張りつつ振り返る。

そこにはレイさん派の無口な騎士さんがいました。相変わらずの無
表情だが少しびっくりしている様にも見える。
まあ自分の護衛している人が夜中に魔物狩つてそれを食つていたら
誰でも驚くわな・・・。

エ、エヘ。思わず下を見る。そこには素敵な血の海＆死に絶えた魔
物がありました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

16ページ（後書き）

シーは基本ネーミングセンスがありません。前に友達の事を笑ってたけど自分も無いです全然w

「ハサウエイさんხամար էնթերք է առաջ բերվել։

私は今レイさんの部下さんと何故だか知らないけど焚き火を囲つて魔物食べてます。

い、いや、落ち着くのよシー！ここで取り乱してはいけないわーー！落ち着いて状況を思い返せばきっと原因が分かるはず！

確かにそう、魔物狩りして素材剥いだ後にその魔物を食べてた。あまりのおいしさに夢中になつて背後には人がいるのに気がつかなかつた。んでようやく気配を感じて振り返つたらレイさんの部下がいた。ここで私はかなり焦つたのよね。ちなみに焦つたポイントはまず夜中に抜け出していること、魔物を食べていること、よりによつて今まで交流ゼロのこの人が来たことなどなど・・・・。もうとにかく焦つていた。そうだ、なのでどうにか現状を打破しようとして何か言わなきやと思いとつさに口にした。

「いや、こんばんはー。月が綺麗な夜ですねー。貴方も食べますか?」

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

「だー! 明らかに」ここで失敗している。なんで誘つているんだ自分よ。いやつらと意識飛ばす魔法かければよかつたのに。アホ! 1

でもさ！食べる]]の人もおかしいよね。
魔物だよ魔物。普通拒否するわ。

ぬああああ、もう原因は分かつたけどどうしようもないよ。
なんて言い訳しよう?

「魔物を退治しておつまましたのよ」とか?

いやそしたら何で食べるんだよって感じだもんな。

一 遅治した魔物は私が食べる」と云ひて淨化されますの
苦しい！ 訳苦しい！ 淨化じゃなくて消化だよねこれは。
胃袋に入つてゐるだけだもんね。 あーどうしよう。

「一か会話の無いこの現状にそろそろ耐えられなくなつてきた。
話しかけるにしてもこの人の名前も知らないしなー・・・。つて名
前聞けばいいんじゃない?」

「あのー・・・貴方のお名前教えていただきてもいいですか?」

「…………ギルバート」

恐る恐る黙々と魔物の肉を食べていた彼に話しかける。この人本当に魔物食べるのに抵抗無いのかね？だとしたらすごいな。

と小声でボソッと言つて再び食べ始めるギルバートさん。
そんなにこの牛豚蛙おいしかったのかな?それともお腹空いてたのか?
すっごい食べっぷりだもんな···若干引くわー。

「ギルバートさんそんなにお腹へってたんですね？」

「別に。
何で？」

「おお！会話が成立したつー！この人自分からは喋んないけどちゃんと答えてくれる人だ。なら一方的に喋つても大丈夫だな。

「いえ、すゞい食べっぷりなので。それに魔物食べる人って中々いなですし……なのにいつぱい食べてるので夕食足りなかつたのかなと思つて。」

「…………これ魔物だつたのか？気がつかなかつた。初めて食べるものだとは思つたが…………。」

き、き、き、気づいてなかつたんかいいいいいいいいい！何この人鈍いわ！

あー…………これがトリップ小説に出てくる天然無口君ですね。分かります。本当にいるのねこういう人つて。しかもお約束のごとくこの人もイケメンだわ。イケメンで天然つて……。おいしすぎるだろ！

つか、騎士団にはイケメン以外は入れないのかつて位みんなイケメンなんだよ。鼻筋通つちやててさ。くつきり二重でさ。あごのラインもシャープでスッキリしててさー。ちっくしょうー！普通はいないのか普通は！

「イケメンに囮まれていいいじゃない！」つて思うかもだけど実際イケメンつて遠くから見るぐらいがいいですわ。あんまり近くにいられると凹む。自分の顔の残念さに。美人は三日で飽きるつて本当だつたんだね！

「魔物つて食べれるものだつたんだな。」

おお、変な思考にはまつてたらギルバートさんが話しかけてくれた。このひと無口かと思つてたけど意外と話せるのね。認識改めとこつ。

「ええ。血が赤いものは食べれますよ。紫や緑色の血の奴は無理です。あともちろん実体が無いものは食べれません。ていうか普通の

方は魔物食べないんですけどね・・・。」

「じゃあ何故食べてたんだ?」

「え、そりや素材を剥いだついでです!つて言つていいのか?これはどうなんだ?」

うーん・・・・まあいつか。この人多分いい人だし。

「えっと魔物の素材集めてたんです。売れますんでこれ。んでそのついでに夜食にしようと思つて。ギルバートさんは何してたんですか?」

「・・・なるほど。素材目的か。俺は食料調達から戻ってきたところだ。」

「食料?もしかしてこの旅の食料つてギルバートさんが用意してくれてたんですか?」

そう聞けば彼は頷いた。

「でも魔物が食べれるなら遠くまでいく必要はなくなる。動物はこの近くにいない。」

「いやだから普通の人は魔物食べませんから!!--!ダメです!魔物はダメですから!!--」

ほつといたらこの人きつと魔物を普通に出しちゃうよ。それはまずい。いろんな意味で。誰から知ったのかとか尋ねられたらこの人正直に私の名前を言うだろ?。そしたらせつかく作ってる私のキャラ(アレンさん用)が無駄になるかもしね。それは阻止せねば!。そつ考えて私は必死にこのことは黙つとくよつに説得を始めた。

結局、この後ギルバートさんに魔物が食べることは2人の秘密に

するように約束させることができたのは太陽が昇り始めてからだつ

た。

天然つて怖い。

とある町の宿で一人、少女がベッドの前に立ち廻くし感激で悶えていた。その顔は喜びにあふれていて下手したら泣きそうである。

「ああ、ベッドよ・・・アレだけ夢見ていたベッドが田の前にあるなんて。感激だわ。奇跡だわ。」

感激で悶えていた少女、シーは幸運に浸っていた。

あーもうキャンプって樂しめるのは2日までだよねー。それ以降はベッドの素晴らしい方がキャンプの樂しさより勝るわやつぱり。そしてその素晴らしいベッドが田の前にある現状。素敵だわ。もう本当素敵。しかもこの宿町で一番いい宿みたいだしラッキー！

ギルバートさんと初めて喋った日の翌日（といつても結局朝日が昇つてから分かれたけど）いつもどおり馬車を走らせて途中止まってお昼ごはんを食べてから5刻は経つただろうかという頃に町に着いた。日はもう傾き始めていてだいぶ肌寒くなっていた。

町はルーカスさんの言つていた通り少し寂れでいるというか廃れていた。観光客は少なそうだしお店も静かで不気味な雰囲気で賑わつてゐとはいえない感じだった。

フェーン以外の町は初めて来たのでちょっと期待していただけに残念だった。

でもアレンさん達がこの町で一番いい宿をとつてくれたみたいなのでぶっちゃけ町がどうなつてようと関係ない。宿が綺麗ならそれでいいのだ。ベッドがあつて屋根があればそれでいいのだ。

ちなみに宿の部屋は私が一人部屋（しかも一番いい部屋）、レイさん、ギルバートさん、ルーカスさんが1部屋、との騎士達も2部屋を6人で使つてはいるみたいだつた。これは夕ご飯のときに確認しました。ちなみに夕食は久々に料理を食べたなーって感じで感動しました。まあアネットさんの料理には劣るけどね。

そういうや私レイさん、ルーカスさん、ギルバートさん、アレンさんと二コラスさんしか名前覚えてなかつたな。だつてみんな漢字じゃなくて横文字なんだもん！覚えにくいんだもん！まあ実際前の3人さえ覚えておけばいいかなーなんて考えてますけどねー。私の脳はそんなに記憶できないから必要最低限しか覚えないのさー！
・・・こういう言い方だと3人以外が必要ないよう聞こえるかもだがそこはノーコメントで。

つてこんなこと考えている暇があつたら早くベッドに寝転ぼう。
バフンツと勢いよく音を立ててベッドに飛び乗る。

むふふ、フッカフカやんーめつさーつをフッカフカーーーーーーーーー
ぱベッド最高！寝袋は長期間は駄目だわー。

しばらく「ロロロロ」して文明のありがたさに浸つた後にこれからどうするかを考える。ちなみに時刻は19刻。規則正しい生活をする人はもう寝ているくらいだ。

まあ考えられる選択肢は

1 「のまま宿でゆっくりして体を休める

2 騎士達と交流を深める

3 町に繰り出す

ぐらいですかね？

うーむーはそんなに疲れてないからなー。

2は移動中でもできるから却下。時間がもつたいたいもんね。
じゃあ3しかないかね？でも町に行くなら騎士と一緒に嫌だよな。
とこうか町に下りるなら魔物から剥いだ皮とか売るつもりだから駄
目だ。

でも騎士達が笑顔で一人で送り出してくれるはずも無い。絶対護衛
(という名の見張り)つけるよなー。撒くこともできるけどそし
たらそうしたで後がめんどくさそう。

ふー・・・・・。じゃあ残された道は一つしかないよね。まあしょ
がない。一つしかないんだもん。私悪くないもん。しょうがないも
ん。

20刻ちょうど。

私は心の中で「しょうがない」を連発しながら部屋にカモフラージ
ュの結界を張り麻袋に今までゲットした素材をつめてこいつそりと窓
から抜け出した。

その姿に気づくものは誰もいなかつた。

閑話　聖なる日（前書き）

クリスマスということで閑話を入れてみました。
この話はシーがフェーンにいたころの話です。
グッダグダになる予感がします・・・；

「聖なる田？なんですかそれ？」

朝起き抜けにアネットおばさん曰く「今日は聖なる田だからいつもよりおめかししなさいよ。」と言われた。聖なる田って初めて聞いたぞ。響きからこいつてクリスマスっぽいけどそんな感じかね？ちょうど季節も冬ですよ。

「シーオ前聖なる田知らないのか？さすが異世界から来ただけあるな・・・。」れを知らないなんて。

そんなこと言われても知らないもんは知らないつす。常識無いみたいに言わないでほしいわー。

「しようがないじゃないですか。知らなくても。で、それって何なんですか？髪のついた赤い服のおじさんガ子供にプレゼント配つて回つたりするんですか？」

「は？赤いおじさん？そんなんじゃないぞ。聖なる田はなあ「聖なる田」は星が一番綺麗に見える田で神様にお願い事をかなえてもられるよ。空に祈りをこめる田だよ。」

デリックさんのセリフの途中にアドルフくんが割り込んできました。デリックさんが「なあ」の口で固まつていてかなり面白こじとになつている。顕外れそうだよデリックさん・・・。

「アドルフ、おめー今俺が話してたるーがーまつたく・・・。」

「「」あん。でも兄さんのたゞたゞしげ説明よつけまく説明できる

よ僕のほうが。」

ドリーナーに130のダメージードリーナーは死んでしまった。
なーんて文字が見えそうながらドリーナーさんが凹んでいる。まあ
弟にそんなこと言われちゃショックだけ。

そんな瀕死のドリーナーさんは放つておいてアドルフ君に質問する。

「お祈りする由つて祈るだけなの?なんかしないの?」

「この日は大体近所の人たちで集まってパーティーしたりするよ。
子供達はおめかしして大人たちからお菓子をもらつたりするんだ。
大人は大体お酒飲んでる。それでね皆でケーキを食べるんだけどね
そのケーキの中の1つにコインを入れておくんだ。そのコイン入り
のケーキに当たった人はプレゼントがもらえるんだよ。」

何そのいろんな地球のイベントの良いところこつぱい詰め込んだ感じの行事は。盛りだくさんだな……。

「あとね、首都とか大きな街になると街全体でお祭りしたりするみたい。その日は皆早めに仕事切り上げてお祭りに参加するんだって。あと・・・・・・」

アドルフくんは普段あんまり喋らないけど喋りだしたらすじいです。
知識量が多いのでめっちゃ話が長くなる。なので割愛。

アドルフ君のありがたいためになる長い話よりとりあえず楽しそうなイベントであることが分かった。パーティーとかほとんどしたことが無いからめっちゃウキウキするわー。

「とりあえず楽しそうだね!パーティーは夜からなんだよね?楽し
みだなあ。」

* * * * *

「酒追加しろ酒ー！今日は飲むぞー！」

「お前はいつも飲んでるだろーがー！」

ガハハハハと豪快な笑い声が響く。

パーティー会場となつたアネット食堂は主に酔っ払つた大人たちによつて賑わつていた。子供のほうが静かつてどうなの・・・。

今はパーティーの終盤。子供達はたくさんお菓子をもらつて大満足している。私も子供つていうほど子供じやないけどいっぱいお菓子をもらつてしまつた。嬉しいけど全部食べたら虫歯になりそう・・・。

ちなみにメインイベント（？）のケーキに入つてゐる「インはアドルフくんがゲットしていてみんなから山ほどプレゼントをもらつていた。今はそのプレゼントに埋もれて頭頂部しか見えなくなつている。あんな状態になるくらいなら外れたほうがマシかもなんて軽く考えるくらいにアドルフくんは疲れていた。ご愁傷さまです。

私は会場が見渡せる隅のほうで料理を咀嚼しながらあたたかい気持ちになつてゐた。

ワーギャーいいながら騒いでいる騎士団やそれを溜め息つきつつ見守るアネットさんたち母親、騎士団に負けないくらいにうるさい町のおじさん達、お菓子を頬張る子供・・・・。

どこを見てもあたたかい、優しい空氣に包まれていた。

自分がいた冷え切つた家族とは全然違う空氣だつた。他人なのにこんなにあたたかいなんてなんて素敵なんだろう。

私この町に落ちてよかつたなあ。この世界に来たことが嬉しいとは思えないし、元の世界に帰る予定だけど、この町にいれて幸せだとは思う。本当によかつた。

このあたたかい日々が、幸せな日々が続くようになると私は神様に祈つた。

「おいシーラーそんなとこでボケツとしてないでこいつち来いよー！」感傷的な気持ちになつてたらすっかりベロンベロンのロウフに呼ばれる。

私は完璧に出来上がつていいロウフに苦笑しつつあたたかな輪の中に入つていつた。

闇話　聖なる日（後書き）

うん、オチもたいしてない、よくわからぬ話になつてすみません。
・・・;
皆さん良いクリスマスをお過りしちゃださいー!

「ふーん中々いい品質だね。こんなのがどこで手に入れたのお嬢ちゃん。

現在、店先に【毛皮、ツノ、魔石その他なんでも買い取ります】つて看板がかかっていた出店にて素材売り払っている真っ最中です。店は適当に選んだのでよく分からぬ。が、ここからが腕の見せ所だ。アネットさんや旅人＆冒険者たちから教わった上手な交渉術を試していくぞ！！

?決して相手に弱気な態度を見せるな!

「ふふ、」この店はどこで手に入れたか教えないで下さいと買い取ってくれないのかしら？なら他に当たらせていただきますけど？」

あ、あれ？強気つていうかなんかキャラが変わった・・・。このままだと女王様コース一直線な気もする。まあ今更やめられないけど

「おや、悪かつたね聞いちゃいけないことだつたかい？そんなこと言わずにもう聞かないから」
「で売つてつてくれよ。」

この店は当たりかなー? だつたらいいんだけど

「そりねえ、まあ値段にともよるかしらへで、おこへりで買ひ氣なの。

「せうだね、中々上等だが少し傷がついてるからなあ・・・全部で
10000キサでどうだい?」
10000キサねえ・・・。

ちなみに『キサ』はお金の単位。1キサが1円って感じです。安めの屋台なら300キサ位で1飯食べれちゃう。なので1000キサは結構贅沢できる。できるんだけど……。

とつあえずこんな心境は顔に出さずにアクションをとつてみる。

「まあ…10000キサー？ 本当！」？

「ああ、本当だとも。では交渉成立でいいのかな？」

「ええ、もちろん…」

そういう微笑を浮かべる。すると店員も笑顔を浮かべてお金を取
りに奥に入ろうとする。

さて、ここで交渉術？ どんな条件でもはじめに出されたものには納
得するな！

「……………なーんていつとでも？ ふざけるのも大概にしてくださいない？」

笑顔を消して店員を見る。すると店員もわざわざまで浮かべていた明
らかな営業用スマイルを消してこちらを見る。

「ふざけているつづいてこう意味かなお嬢ちゃん？」

「あら？ そのままの意味ですけど。言葉も理解できないんですね？
これが1000キサってふざけている以外の何ものでもないでし
ょう。私がそれで納得するとお思い？」

うつ わー 完全に女王様だよ……。これはアレンさんたちの前でず
つと演技してるから変な癖が出てきたんだ、絶対。一回始めたらな
りきつちゃうんだよ最近。おかげでルークスに笑われっぱなしだよ！
でもま、いいさ今は役立つてるからね。明らかに店員さん動搖し始

めてるし今畠み込むしかないね！

交渉術？嘘をつくながら突き通せつ！

ところ」と今から私につきます！すみません！！

「お嬢ちゃん、君にとつては10000キサ以上の価値かもだけど世間的にはこんなもんなんだよ。むしゃうづかでは高めに買い取つてるんだけどねえ・・・。で、こまならまだおじさんも許してあげるからね。交渉成立でいいかな？」

「ハアー。だから何度言わせる気です？その値段じゃ私の素材とは釣り合いません。少なくとも貴方達の提示した金額の10倍はするんですよ？その位」「存知だと思つてこのお店にしたのに。」
はい嘘でーす。10倍するのかなんて知りませんけど何か？

100000キサつていうのは私の願望です。そん位稼ぎたいからです。すみません店員さん。反省はします。でも後悔はしてない！

「100000キサつて・・・。お嬢ちゃんこそふざけてるのか？」
つていう店員さんの顔に怒りと少し焦りが見える気がする・・・。
え？まさか本当にそんなに価値あるの？これつて？

「ふふ、私は正氣ですよ。貴方こそ嘘をつくならむづし表情の練習してからのほうがいいですわよ？顔に書いてありますもの。本当は10000キサどころじゃなく100000キサ以上の価値ありますつて。」

半笑いで言つてみた。

すると店員が怒りで顔をカツッと染めたと思つたら叫びだした。

「この餓鬼が！下手に出でたら調子乗せりやがつて。そうだよ、お前
が言つようになこの素材たちにはすごい価値があるんだよ！それをみ
すみす逃してたまるか！――オイ、お前らこのがきどつかに連れて
行け！売り払つてもいいぞ。好きにしろ。」

店員がそんなことを言つてゐるとき私は、すげーこの人。完全に漫
画とかに出でくる『町のチンピラ』だよ。すぐにキレる事といい、
セリフといい、価値についてペラペラ喋つちやうとこりとこり完璧
だよ・・・・。ある意味尊敬しちやうよ。とか考えていた。
だつて実際、このやられキヤラ共にだつたら5秒で勝てる自信あり
ます! だつてチートですから!

と余計なことを考えていたらチンピラB（シー命名）が私を捕らえようと近づいてきた。 しようと、魔法使うかー。 今日は寒いから水系はやめようと思いきやの魔法を使おうとしたらチンピラBが沈められてた。

あれ？まだ私何もしてないですよ？なに持病の心臓発作でも起きましたか？

つて誰がBさんの側にたたずんでるー。その人明らかにBさんの仲間じゃないオーラがてるよ。チンピラとは呼べないこりゃ、なんというかスターな感じのオーラが。

「どうしたいきなり？・・・！？お前誰だ！いつからセリヒーいたつ

いや、チンピラさんか疑問を全部口に出してくれました。さすがやられキャラー。

「…………」

「つ何とかいいやがれ！！」の……！」

そういうながらAさんが短剣片手にスターさんに襲い掛かる。

するとアリさんはその攻撃を軽々とよに首に手刀をしれてAさんも沈めてしまった。

そしてものすごい早さでチンピラたちの2／3位を沈めた後、残つてゐる奴らに静かに言つた。

「そいつらを連れてこの町から出て行け。次に俺の前に姿を現したらそのときは氣絶じやすまないぞ。」

その言葉にチップリたちは出世ものままにここで仲間担いで逃げていく。

でまあ、今更だけどだれ？この人？

19ページ（後書き）

活動報告始めました！良かつたら見てください^-^

「いやー助けてもらつた拳句お店の紹介までしていただいてすみません。」

「気にするな。さつきの連中はいつか追い出そうと思つてたんだ。丁度良かったといっては何だが切り込む口実ができる助かったよ。」
そういうつてランスロットさんが笑う。さつきのチンピラの前とはまつたく雰囲気が違つてこれまた素敵である。

現在私は先ほど助けていただいたランスロットさんにちゃんとした買い取りをしてくれるお店に案内してもらつています。

ランスロットさんはこの町を拠点としている冒険者さんらしい。さつき証明書を見せてもらつた。言われてみれば格好がもう冒険者だつたんだけどね。

冒険者は黒を基調とした服を着る。そんで全国各地にあるギルドのどこかで名前を登録してランクをつけてもらい身分証明書みたいなものをもらつ。その証明書を持つていればどこのギルドに行つても一発でどんな人だか分かるんだつて。便利だわー。その登録でもう冒険者らしい。なので冒険者はいっぱいいる。まあ1年間に決められた回数依頼をやらなかつたり、規則破つたりすればギルドから名前消されるらしいけどね。

あ、拠点っていうのは最初に登録したギルドがある町のことでなにか大切なこと、例えばランクアップの試験とかの時は自分の拠点に戻らなきやいけないんだつて。私は冒険者じゃないんでこれ以上詳しいことわかんないけどね。

ちなみに後知つてるのは冒険者ランクのこと。ランクは最低がGランクから最高がSランクまである。今のところSランクの人は1人しかいない。Aは4人。Bは18人でなんとランスロットさんはBランクからしい！A・Sの後に聞くと少しショボく聞こえるがBランクもかなりすごくてほとんどの人はすっこいがんばつてもじにいけない人も多いらしい。すごいわー。ランスロットさん。私ファンになりましたよマジで。

「ところでシーチャンは一人でこの町に来たのか？」
ランスロットさんに見とれてたら（彼もかなりのイケメン。歳は30前半くらいで少し渋めな感じがまたかっこいいです）話しかけられる。

久々にちゃんと付けで呼ばれて何や嬉しくなる。こういう風に普通に話すのやつぱりいいな。だから巫女姫のことは黙つといたほうがいいよね。ランスロットさんに嘘つきたくないけど仕方あるまい。それに信じてくれない可能性のほうが大きいしね。

「いえ、ちゃんと連れがいますよ。でも彼ら魔物に襲われちゃって・・・。そんなに重症ではないんですけど大事をとつて今宿で体を休めてるんです。皆私をかばいながらだつたから怪我しちゃって。だから私少しでもみんなによくなつて欲しくて前に知り合いにもらつたこの素材達を売ろうと思つてたんです。」

あ、あれえ？連れがいるんですけど言おうとしてたのに口から次々と言葉を発してしまつたぞ！？自分でびっくりだわ。何この嘘・・・。
魔物に襲われるって言つか私が魔物襲つてましたけどね！

「そうだったのか・・・。大変だったな。でも一人で歩くのは危険だから気をつけたほうがいいぞ。お、丁度ついたよ。ここがその店だ。」

そういうてランスロットさんが指差したお店は少しレトロな雰囲気

だけどかわいいらじこ店構えのお店だった。

「ショリー！邪魔するぞ。客を連れてきた。」

そう言いながら慣れたように店に入るランスロットさんの後に続く。実はさつき入り口に本田休みますって紙が見えたんだけどそれはよかつたのか・・・？

「ランス、今田は休みよ。まつたぐ・・・。」

「まあやうやうな。道具屋のほうの客連れてきたんだからさ。」

「あらお嬢さん、その可愛いらじこ子のことかしぃへ。」

「ああ、彼女はシー。あの出店構えてた奴らの店で絡まれてたから連れて来た。お前のところなら信用できると思つてな。」

店のカウンターに座つていたショリーと呼ばれた女性は私を見ながら妖艶に微笑んだ。

・・・・・・やつぱこの世界つて美形しかいないんだろうー・そつなんだろー！なんだあのものすゞい色氣たつぱりの美女は！！！ちつくしょう何だよあのスタイル。もやは罪だらう！思わず自分の胸を見た私は通常なはず。誰だってやるさ彼女を前にしたら。つてくらいのスタイルです彼女。ああ、なんかもう女として全て負けた気がする。

内心ではこんな風にかなり勝手にいじけつつも挨拶をする。

「はじめましてシーと申します。おやすみなみに申し訳ありません。」

「あらあーランスが連れて來たにしては礼儀がいいわねー。好きよ

そういう子は、私はショリー。この酒場兼道具屋をやつてるわ。よろしくね。」

「い、いちいち色っぽいですショリーさん！好きよつておひつと言われただけで赤面しそうだわ！」

あーもう駄目だ。この色気見てたら本当に自分のショボさに死にたくなってしまうので早速だが本題に入ろう。

「こちらこそよろしくお願ひします。それで早速なんですが買い取つていただけますか？」

そう言いながら素材達を取り出してカウンターに置いた。するとそれを見た彼女が「まあ！」と少し嬉しそうに驚いた声を出して査定し始めた。

8分くらいだろうか、結構念入りに査定したらしい彼女が驚きの金額を提示した。

「すつごい珍しい素材だわ。それに状態もいい。ざつと軽めに見積もつても700000キサはいくわね。ふふ、うちで売ってくれてありがとうシーチャン」

語尾に音符つけながら彼女は心底嬉しそうに言った。

つーか、え？ナナジュウマンキサ？ななじゅつまんきせ？70000キサ？

「な、ななな700000キサア！…？」

大声で叫んでもしようがないと思つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8852y/>

召還者の異世界奮闘日記

2011年12月27日23時43分発行